

平成19年度 文部科学省選定
「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」

東京女子大学
マイライフ・マイライブラリー
学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム
実績報告書
2007 - 2010 年度

刊行にあたって

東京女子大学は、文部科学省が GP 事業を開始した 2003 年度に「女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開」(副題は『女性の自己確立とキャリア探求』の基礎をつくるリベラル・アーツ教育)で特色 GP に選定されました。翌 2004 年度に「キャリア・イングリッシュ・アイランド」(副題は英語の運用能力を発言力・行動力に転化するための取組)で現代 GP に選定され、2007 年度に「東京女子大学キャリア・ツリー」(副題はリベラル・アーツ教育に基づくキャリア構築支援)が 2 つ目の現代 GP に選定されています。そして同じ年に「マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム」が学生支援 GP に選定されました。

東京女子大学のこれらの GP 事業は、一貫して建学以来 90 年以上に及ぶ大学の歴史の中で培ってきたリベラル・アーツ教育の実績を現代に生かすために、新たな展開をはかることを目指しています。

とくに「マイライフ・マイライブラリー」は、図書館という大学の教育研究を担う重要な拠点において、学生支援の新たな展開をはかることをねらった点で、たいへん特徴的であり、かつ大学の教育の活性化に果たす意義は非常に大きいと考えております。

2007 年度に開始したプログラムは今年度で 4 年目を迎え、文部科学省の補助事業期間の最終年度となりました。2011 年度からは当初の計画通り、大学の経常的な事業として、さらなる充実をはかっていくこととなっています。そのため今年度は自己点検・評価を実施し、その結果に基づき、外部評価をしていただきました(両報告書は本年 1 月に本学 Web サイトで公開)。

GP 事業の使命として「広く他大学の参考となる」ことが求められています。このたび、本年 1 月 17 日に実施した「公開実績報告会」の記録を含めた 4 年間の歩みについて、本報告書を発行するとともに、本学 Web サイトでも公開することといたしました。

この報告書が、本学のマイライフ・マイライブラリーの取組みのさらなる発展につながるとともに、他大学等の皆さまの参考となれば幸いに存じます。

2011年3月 東京女子大学 学長 眞田雅子

東京女子大学「マイライフ・マイライブラリー」実績報告書

目次

刊行にあたって	1
「マイライフ・マイライブラリー」概要	3
各年度の活動実績	5
1．2007（平成19）年度	5
2．2008（平成20）年度	7
3．2009（平成21）年度	10
4．2010（平成22）年度	13
滞在型図書館	15
1．フロア改修	15
2．各スペースのコンセプト・利用状況・学生満足度	17
3．書架へのガイド等（各種の取組み）	20
4．滞在型図書館としての利用実態	21
学生協働サポート体制	23
1．学生アシスタントの人数	24
2．学生アシスタントのミーティング記録	25
3．図書館職員の関わり	34
4．学習コンシェルジェの活動報告	36
学習支援プログラム	43
1．プログラムの見直し	43
2．ガイダンス	44
3．基礎的日本語能力養成講習	51
公開実績報告会	53
1．概要	53
2．実施記録（要旨）	54
3．参加者アンケート集計結果	75
あとがき	83

東京女子大学図書館ホームページに本報告書と以下の資料を掲載。

- 公開実績報告会当日の発表資料
- 学生アシスタント作成の「図書館だより」

「マイライフ・マイライブラリー」概要

「マイライフ・マイライブラリー」 学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム は、図書館を学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援） 活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備するプログラムである。

学生はそれぞれのニーズに応じて、図書館内学習支援の利用、図書館以外の学内諸部署と連携して企画される各種のセミナー等への参加、学生アシスタントからの助言等を選択できる。これら多様なサービスを利用することで、思考力、行動力、コミュニケーション力を養い、社会人基礎力を身に付けることができ、本学が目指す女性のキャリア構築力の育成につながる。また、「支援される立場」から学生アシスタントとして「支援する立場」へとステップアップしていく可能性も期待でき、学生相互の自発的交流を通して、繋がり合い、啓発し合い、社会人としての資質をも高めることを目指すものである。

（１）滞在型図書館

近年本学図書館では利用者の減少傾向が続き、情報検索ガイダンスを精力的に展開したり、開館時間の延長を行う等の努力を続けていたものの、従来のサービスの展開だけではこの利用者減少傾向を止める方策を見出せずにいた。

図書館内部で、館内の学生の利用状況を観察し、日々伝わってくる学生の声に耳を傾けながら、新しい展開を模索した結果、滞在型図書館を目指す必要があること、またこのための飲食スペースやレポート作成のための PC 環境等の創出が急務であるとの考えに至った。滞在型図書館実現に向けて図書館委員会で検討を行い提案を重ねる中で、2006 年度に図書館 1 階の改修計画案に対して、年次計画による予算措置がなされる見込みが立った。

2007 年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に応募の際、図書館の改修計画案をさらに「学生支援」という視点から組み直して申請した。このプログラムが選定され、これを期に年次計画ではなく一気に改修することとなり、2007 年度末の 2008 年 3 月 31 日に改修工事を完了し、2008 年 4 月 1 日から新しいフロア構成の図書館として生まれ変わった。（「 -1.フロア改修」参照）

新しいフロア構成のコンセプトは「多様化する学生のニーズに応えた多様なスペースを提供する」というものであり、それによって「滞在型図書館」を目指す枠組みができた。「活発な交流の場」と「静謐な環境」、「学習」と「くつろぎ」等、活動内容の異なる複数のスペースを配置し、学生が滞在しながら、自分のその時々々の目的に合わせて、スペースを選んで利用できるようにすることがねらいである。また、新たなスペースでは、従来からの図書館資料（＝紙媒体の情報）と PC を利用したデジタル情報がその場で利用できる環境を整え、図書館内で学習が完結できるよう学習環境を充実させた。

（２）学生協働サポート体制

学生を学生アシスタントとして積極的に活用し、図書館を利用する学生を支援することを目指した制度である。学生アシスタントには、「ボランティア・スタッフ」、「サポーター」、「システム・サポーター」、「学習コンシェルジュ」の 4 種を設けた。支援を受ける学生が自分の目的に応じてアシスタントを選ぶことができるとともに、学生アシスタントも自身の特性に合わせた活動が選べる。このような多様性を持たせることで、それぞれの活動を通じて、学生アシスタント自身も成長がは

各年度の活動実績

2007（平成19）6月に文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に、事業名称「マイライフ・マイライブラリー」、副題「学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム」として申請し、9月に選定され、11月からこの事業を開始した。

1. 2007（平成19）年度

学生協働サポート体制

11月より、システム・サポーター、サポーター、ボランティア・スタッフが活動開始。

ボランティア・スタッフ

11月に発足、7名が申込み、5名が実施した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して実施し、総回数は62回だった。

サポーター

11月に発足、27名が申込み、10名を採用した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して行い、実施回数は177回だった。

システム・サポーター

12月に発足、7名が申込み、7名を採用した。図書館内のノート型PCの操作説明とトラブル対処を行い、実施回数は52回だった。

コンピュータと携帯電話による自習システム（E-testing等）

就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ) 申込者：768名

このプログラムの提供については、キャリア・センターと連携し、キャリア・センター主催の就職ガイダンスでプログラムの説明を行い、利用を促した。

英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー（携帯電話） 申込者：303名

漢検トレーニングプログラム（コンピュータ） 申込者：336名

文検トレーニングプログラム（コンピュータ） 申込者：250名

図書館情報リテラシー教育プログラムの実施

レポートの書き方の基本（90分×5回）

NPO 法人大学図書館支援機構より講師を派遣してもらい、図書館を利用したレポートの書き方の基本的な事柄を論述編と体裁編に分けて説明した。延べ34名参加。

著作権(60分×3回)

NPO 法人大学図書館支援機構より講師を派遣してもらい、大学生として知っておかなければならない著作権の知識と著作物の扱いに関する事項を中心に説明した。延べ5名参加。

My Library(60分×3回)

丸善(株)よりテクニカルアドバイザーを講師として派遣してもらい、図書館サービスをWeb上で学生自身が使いやすいようにアレンジできる機能を紹介した。延べ5名参加。

「マイライフ・マイライブラリー」の学内外への周知

新たな図書館利用案内を作成し、図書館内で学生に配布するとともに学内諸部署に配布した。10月には「マイライフ・マイライブラリー説明会」を開催し、教員、学生が241名参加した。また、

本プログラムのパンフレットを作成し、図書館内で学生に配布するとともに、学内諸部署に配布した他、他大学と他大学図書館、延べ 993 校に郵送したことにより、本取組の公表・普及をはかった。

東京女子大学図書館ホームページ

全面改訂し、図書館の情報活用法の提供に加え、マイライフ・マイライブラリーの取組内容、イベント・スケジュール、自習プログラムについての紹介ページも新たに作成・公開した。

電子掲示板の設置による学内情報の提供

電子掲示板を設置して、2月より図書館情報の配信を開始、3月からはキリスト教センター、キャリア・センターと連携して収集した情報の発信を行った。

2. 2008 (平成20) 年度

学生協働サポート体制

ボランティア・スタッフ

5月から活動を開始し、前後期延べで、20名が申込み10名が実施した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して実施し、総回数は129回だった。

この他、

「学生選書ツアー」に参加して蔵書の選書を行い、自身が選んだ本の書評を書く活動に計8名の学生が参加。それらの書評は本のカバーとともにコミュニケーション・オープンスペースに展示。

「お薦め図書ポップ」作成の募集に計3名(作品数5)の学生が応募・参加し、各自が作成したポップをコミュニケーション・オープンスペースに展示した。

「図書館だより」の企画編集の募集に計9名の学生が応募・参加し、「新スペース紹介」、「OPACを活用しよう」、「AVブース紹介」という3つの特別号を発行した。

サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、53名が申込み46名を採用した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して行い、実施回数は785回だった。

システム・サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、24名が申込み16名を採用した。メディアスペースのPCと貸出用ノート型PC(計70台)の操作説明とトラブル対処を行い、実施回数は374回だった。学生アシスタントの運営によるメーリングリストで日々の活動報告を行って、タイムリーな情報交換をはかった。

学習コンシェルジェ

6月から活動を開始し、大学院学生9名が申込み、5名を採用した(前期に採用し、後期も継続)。学部学生に対して、レポートの書き方の基本や情報検索についての支援を行った。実施回数は128回だった。

コンピュータと携帯電話による自習システム(E-testing等)

就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ) 申込者:653名

英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー(携帯電話) 申込者:511名

文検トレーニングプログラム(コンピュータ) 申込者:153名

WebClass(コンピュータ)のコンテンツ

TOEIC・英文法トレーニングプログラム 利用者:656名(延べ)

図書館情報リテラシー教育プログラムの実施

情報リテラシー講演会:90分×1回(5/13)、25名参加。

はこだて未来大学教授美馬のゆり氏を招き、女性における「自立・学び・生き方」をどう構築するか提起する講演会を開催した。

レポートの書き方の基本:90分×(前期6回、後期6回) 延べ159名参加。

NPO 法人大学図書館支援機構より講師を派遣してもらい、図書館を利用したレポートの書き方の基本的な事柄を論述編・体裁編、構築編・文章編に分けて説明した。

大学生としてのノートのとり方:90分×(前期2回、後期1回) 延べ23名参加。

初年次教育に実績のある講師を招き、授業のパターン別のノートのとり方等、具体的な事例を通

して、講義内容の効果的な書きとり方を説明した。

大学生としての本の読み方：90分×（前期2回、後期1回）延べ21名参加。

上記ノートのとり方と同講師により、授業の予習・復習、レポート・論文作成時に役に立つ本の読み方を、読書カード作成方法も交えて説明した。

「マイライフ・マイライブラリー」の学内外への周知

他大学等からの見学者：26回受入れ、見学者数合計117名

学外での事例報告（講演会）：7回、参加者数合計566名

6/13 私立大学図書館協会 東地区部会 研究講演会

9/5 公立大学協会図書館協議会研修会

9/13 三田図書館・情報学会 月例会

10/17 私立短期大学図書館協議会研修会

3/4 平成20年度茨城県図書館協会大学図書館部会研修会

3/13 独立行政法人日本学生支援機構主催 平成20年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会における事例紹介

3/18 平成20年国立大学図書館協会地区協会助成事業 東海北陸地区国立大学図書館協会主催『ラーニング・コモンズ』フォーラム

学内での報告（在学生父母、職員対象）：3回、参加者数合計約700名

雑誌への掲載（依頼原稿）

NPO 法人大学図書館支援機構「ニュースレター」への記事掲載

（社）日本図書館協会機関誌「図書館雑誌」11月号の「大学特集」への記事掲載

東京女子大学図書館ホームページ

前年度と同様に継続実施。

電子掲示板の設置による学内情報の提供

前年度と同様に継続実施。

多様なスペースの提供

前年度末（2008年3月31日）に改修が完了し、2008年4月1日から、次のような多様なスペースを備えた新たなフロアの提供を行っている。

1 階：メディアスペース、コミュニケーション・オープンスペース、リフレッシュルーム、プレゼンテーションルーム、グループ閲覧室（増設）

2 階：個人ブース

キャリア構築支援のためのキャリア・センター等の各種企画・説明会の図書館内開催による、学内他部署との連携強化

キャリア・センター主催の1年次と2年次のグループワーク（各2回計4回）留学生特別科目「日本語」授業でのプレゼンテーション、学生と教員による研究会等が図書館内で行われた。

12月よりキャリア・センターの協力を得て、コミュニケーション・オープンスペースに次のようなコーナーを設けた。

「キャリア・センターお薦め本コーナー」

キャリア・センターが本学学生の就職活動に役立つキャリア関連資料（書籍・雑誌）を選書し、それらを図書館で購入して、コミュニケーション・オープンスペースの一画に設けたコーナーに配架し、館内利用に供した。

また、2007年度の実績に記載の通り、コンピュータ自習システムの E-testing（就職試験対策プログラム）の提供については、キャリア・センター主催の就職ガイダンスで図書館職員がプログラムの説明を行い、利用を促す等、連携をはかっている。

基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援

「実践コミュニケーション力養成」講習：90分×前期4回、延べ55名参加。

優れたコミュニケーション手法を紹介する視聴覚資料や、インプロ（即興劇）、フィールドワークの手法も活用しながら、コミュニケーションにおいて最も大切な“場”に参加する“姿勢”を学ばせるとともに、実践的トレーニングを通して、「活きた」コミュニケーション・ツールとしての「日本語」を体感させた。

「文章の読み書き 入門編」講習：90分×（前期10回、後期5回）、延べ192名参加。

テーマ別に実践問題をこなしながら、自分の「意見」を自分の「ことば」でわかりやすく「表現」するために必要なスキルを身につける講習を実施した。

3. 2009 (平成21)年度

学生協働サポート体制

ボランティア・スタッフ

5月から活動を開始し、前後期延べで、7名が申込み6名が実施した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して実施し、総回数は38回だった。

この他、

「学生選書ツアー」計14名の学生が参加。それらの書評は本のカバーとともにコミュニケーション・オープンスペースに展示。

「お薦め図書ポップ」作成の募集に計11名(作品数19)の学生が応募・参加し、各自が作成したポップをコミュニケーション・オープンスペースに展示した。

「図書館だより」の企画編集の募集に計13名の学生が応募・参加し、「学生アシスタントへのアンケート」と「レポートを快適に書くために」という2つの特別号を発行した。

サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、63名が申込み55名を採用した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して行い、実施回数は809回だった。

システム・サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、27名が申込み27名を採用した。メディアスペースのPCと貸出用ノート型PC(計70台)の操作説明とトラブル対応を行い、実施回数は417回だった。学生アシスタントの運営によるメーリングリストで日々の活動報告を行って、タイムリーな情報交換をはかった。

学習コンシェルジェ

4月から活動を開始し、大学院学生16名が申込み、16名を採用した(前期に採用し、後期も継続)。学部学生に対して、レポートの書き方の基本や情報検索についての支援を行った。実施回数は315回だった。

博士後期課程の学習コンシェルジェによる、ガイダンスは4名が担当し、実施回数は19回だった。

コンピュータと携帯電話による自習システム(E-testing等)

就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ) 申込者:661名

英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー(携帯電話) 申込者:249名

WebClass(コンピュータ)のコンテンツ 利用者:1,445名(延べ)

図書館情報リテラシー教育プログラムの実施

2008年度に見直しを行った結果、以下のように、情報検索ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンスとして実施した。

情報検索ガイダンス:90分×(前期32回、後期16回) 延べ892名参加。この内、学習コンシェルジェ担当は、前期5回、後期10回

「基本的なレポートの書き方」ガイダンス:90分×(前期6回、後期1回) 延べ175名参加。この内、学習コンシェルジェ担当は、前期3回、後期1回

「マイライフ・マイライブラリー」の学内外への周知

他大学等からの見学者:34回受入れ、見学者数合計118名

学外での事例報告（講演会）：1回

1/7 文部科学省主催「大学教育改革プログラム 合同フォーラム」分科会（総合的な学生支援）での事例報告（図書館長）

学内での報告

4/6 新生オリエンテーションでボランティア・スタッフの学生が「在学生の大学生活体験談」においてマイライフ・マイライブラリーの取組を紹介。

新聞記事

9/9 朝日新聞 28面「きょういく@東京」で紹介された。

雑誌への掲載（依頼原稿）

（社）日本私立大学連盟「大学時報」2010年1月号（330号）への記事掲載

「マイライフ・マイライブラリー」「学習滞在型図書館」のチャレンジと実践（図書館長）

東京女子大学図書館ホームページ

前年度と同様に継続実施。

電子掲示板の設置による学内情報の提供

前年度と同様に継続実施。キャリア・センター、学生生活課、国際交流センター、比較文化研究所等、情報発信部署が増加した。

多様なスペースの提供

前年度と同様に継続実施。

キャリア構築支援のためのキャリア・センター等の各種企画・説明会の図書館内開催による、学内他部署との連携強化

キャリア・センター主催の1年次と2年次のグループワーク（各2回計4回）、キャリア・イングリッシュ・アイランドの英語トレーニング、学生と教員による研究会等が図書館内で行われた。

コミュニケーション・オープンスペースに次のような2つのコーナーを設けた。

「キャリア・センターお薦め本コーナー」

キャリア・センターが本学学生の就職活動に役立つキャリア関連資料（書籍・雑誌）を選書し、それらを図書館で購入して、コミュニケーション・オープンスペースの一画に設けたコーナーに配架し、館内利用に供した。

「学生グループ選書コーナー」

活発な課外活動を行っている学生グループから企画を募集し、それに合った書籍・資料の購入あるいは寄贈の受入れを行って、コミュニケーション・オープンスペースの一画に設けたコーナーに、グループの活動内容、各資料についての学生による推薦文と表紙カバーを展示した。

また、2007年度の実績に記載の通り、コンピュータ自習システムのE-testing（就職試験対策プログラム）の提供については、キャリア・センター主催の就職ガイダンスで図書館職員がプログラムの説明を行い、利用を促す等、連携をはかっている。

基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援

見直しをはかり、「基礎的日本語能力養成講習」とし、本学非常勤講師経験者等を講師に選定して実施した。前期は主に入学間もない1年次学生を対象に行い、後期はキャリア・センターと連携して、主として就職活動を考えている人を対象に行った。

前期テーマ：「話しことば」を「書きことば」に、90分×2回、延べ59名参加。

後期テーマ：‘わたし’をプレゼンテーションすることば、90分×2回、延べ79名参加。

4. 2010（平成22）年度

学生協働サポート体制

ボランティア・スタッフ

5月から活動を開始し、前後期延べで、16名が申込み13名が実施した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して実施し、総回数は181回だった。また、メーリングリストを立ち上げ、図書館の利用状況について報告し情報の共有を行った。さらに、利用者に認知してもらうため、学生アシスタント自身が企画した「利用促進デー」を11月下旬の3日間実施した。

この他、

「学生選書ツアー」に参加して蔵書の選書を行い、自身が選んだ本の書評を書く活動に計24名の学生が参加。それらの書評は本のカバーとともにコミュニケーション・オープンスペースに展示。

「お薦め図書ポップ」作成の募集に計14名（作品数28）の学生が応募・参加し、各自が作成したポップをコミュニケーション・オープンスペースに展示した。

「図書館だより」の企画編集の募集に計14名の学生が応募・参加し、「地階特集！！」、「情報機器を使いこなそう」、「個人ブース」という3つの特別号を発行した。

サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、117名が申込み64名を採用した。図書館の利用案内を図書館利用者に対して行い、実施回数は819回だった。

システム・サポーター

5月から活動を開始し、前後期延べで、35名が申込み35名を採用した。メディアスペースのPCと貸出用ノート型PC（計70台）の操作説明とトラブル対応を行い、実施回数は454回だった。学生アシスタントの運営によるメーリングリストで日々の活動報告を行って、タイムリーな情報交換をはかった。

学習コンシェルジュ

4月から活動を開始し、大学院学生16名が申込み、16名を採用した。学部学生に対して、レポートの書き方の基本や情報検索についての支援を行った。実施回数は345回だった。

学習コンシェルジュによる、ガイダンスは6名が担当し、実施回数は29回だった。

コンピュータと携帯電話による自習システム（E-testing等）

就職試験対策プログラム E-Testing(コンピュータ) 申込者：700名

英単語・漢字トレーニングプログラム モバイル・アカデミー（携帯電話） 申込者：204名

WebClass（コンピュータ）のコンテンツ 利用者：1,337名（延べ）

図書館情報リテラシー教育プログラムの実施

情報検索ガイダンス：90分×（前期40回、後期17回）延べ1,066名参加。この内、学習コンシェルジュ担当は、前期12回、後期11回

「基本的なレポートの書き方」ガイダンス：90分×（前期4回、後期3回）延べ150名参加。

この内、学習コンシェルジュ担当は、前期3回、後期3回

「マイライフ・マイライブラリー」の学内外への周知

他大学等からの見学者：37回受入れ、見学者数合計 141名

学内での報告

4/5 新入生オリエンテーションでサポーターの学生が「在学生の大学生活体験談」においてマイライフ・マイライブラリーの取組を紹介。

新聞記事

1/8 朝日新聞で「公開実績報告会」が紹介された。

1/13 読売新聞「大学の實力」欄に掲載された。

書籍への掲載 5/21 発行

『学びの空間が大学を変える』第2部 Part.3 (pp.77~99)

1/17 公開実績報告会 15:00~18:00

・実績報告会参加者：210名

他大学図書館職員等の学外者：153名、学内者：57名

・報告会の前後の図書館ツアー参加者：約110名

東京女子大学図書館ホームページ

前年度と同様に継続実施。

電子掲示板の設置による学内情報の提供

前年度と同様に継続実施。

多様なスペースの提供

前年度と同様に継続実施。

キャリア構築支援のためのキャリア・センター等の各種企画・説明会の図書館内開催による、学内他部署との連携強化

キャリア・センター主催の1年次と2年次のグループワーク(各2回計4回)、キャリア・イングリッシュ・アイランドの英語トレーニング、学生と教員による研究会等が図書館内で行われた。

2009年度と同様に、コミュニケーション・オープンスペースに「キャリア・センターお薦め本コーナー」と「学生グループ選書コーナー」の2つのコーナーを設けた。

また、コンピュータ自習システムのE-testing(就職試験対策プログラム)の提供についても2009年度までと同様に、キャリア・センター主催の就職ガイダンスで図書館職員がプログラムの説明を行い、利用を促す等、連携をはかっている。

基礎的日本語能力養成プログラムによる初年次学習支援

前期テーマ：「話しことば」を「書きことば」に、90分×2回、延べ23名参加。

後期テーマ：「わたし」をプレゼンテーションすることば、90分×2回、延べ45名参加。

かれるよう配慮した。

「ボランティア・スタッフ」の業務は、図書館の利用方法の案内、「図書館だより」作成、「お薦め図書ポップ」作成、「学生選書ツアー」書評作成、自身の個性を発揮できる場となっている。図書館の利用方法の案内は、自身が利用者として図書館を利用しながら、利用者対応をする余裕があるときはボランティア・スタッフとして活動するものであり、参加しやすい形態を取っている。

「サポーター」は返本作業をしながら、利用案内をする。図書館職員は基本的には1階カウンターにいたので、問合せのためにカウンターに来るのが面倒で不明な点をそのままにしてしまう利用者も多いと思われる。また、学生同士のほうが気軽に質問できるという利点もある。

「システム・サポーター」はパソコンやコピー等の機器類の操作を支援する。アシスタント・アイランドに席を設けてあるが主にメディアスペース、コミュニケーション・オープンスペースを巡回しながら、利用者への質問対応に当たる。

「学習コンシェルジェ」は大学院学生が担当する。アシスタント・アイランドで基本的なレポートの書き方や資料の探し方、また学習全般に関する質問に対応する。

チャレンジしやすいモデルを設定することにより、自分に自信が持てない学生のやる気を喚起し、一歩前に踏み出させることを目的としている。役割を与えられ、他人から感謝されることの喜びを知ることによって自信を持ち、もうワンランク上の「サポーター」へ、更には「システム・サポーター」、「学習コンシェルジェ」へステップアップしていくという一連の形がロールモデルとなることも期待している。更にアシスタントを担当する者は、質問者に対し、アシスタント同士で連携を取り合い、相手の希望を尊重した助言を行う。このような学生が学生を支援する相互協力を基本とすることで、支援する側、支援される側双方が人間的にも社会的にも成長することを目指している。

(3) 学習支援プログラム・他部署との連携

「マイライフ・マイライブラリー」では、図書館において学生の大学生活を支援するための方策として、各種の支援プログラムを展開している。その過程においては、学生の利用状況等を見ながら適宜見直しを行ってきた。主なプログラムは以下の通りである。

ガイダンスの実施

当初「情報リテラシー教育」としてスタートしたが、見直しを行い、2009年度からは「情報検索」ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンスの2本立てで実施している。大学院学生である学習コンシェルジェもこのガイダンスを担当している。受講者に好評で、学習コンシェルジェ自身の成長もはかることができている。

「情報検索」能力の養成自体がキャリア構築につながるため、このプログラムは、「マイライフ・マイライブラリー」においても重要な位置を占めるものである。

コンピュータ自習システム

就職試験対策プログラムであるE-testingやWebClassのコンテンツの提供等の各種サービスを提供している。

これらについては、キャリア・センター、情報処理教育運営委員会等と連携をはかりながら実施しており、とくにWebClassのコンテンツに関しては、正規授業での活用もなされている。

基礎的日本語能力養成

大学での学習を可能にするスタディ・スキルと大学生活の基本となるスチューデント・スキルの習得に欠かせない文章表現を身につけるため、基礎的日本語能力養成講習を提供している。2008年度から外部講師の派遣を委託する形で開始したが、2009年度からはマイライフ・マイライブラリー運営委員会で本学非常勤講師経験者等を講師に選定して実施している。

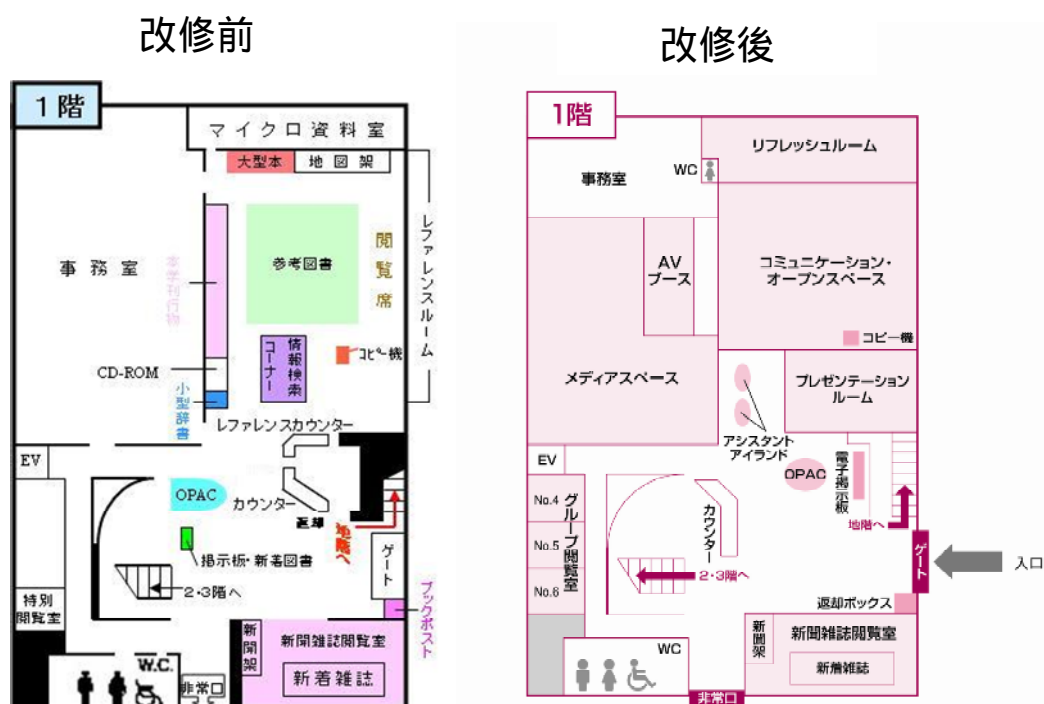
滞在型図書館

「滞在型図書館」を目指して2008年度から新しいフロア構成の図書館に生まれ変わり、学生の図書館利用の様子が大きく変わった。ここではフロア改修までの経緯と、各スペースのコンセプトについて述べた後、利用状況・学生満足度、「滞在型図書館」としての利用実態などについてアンケートをもとに見ていきたい。

1. フロア改修

現在の図書館は、1996年8月に新築された建物で、2007年度末の改修前の1階のフロア構成は下の左図の通りであった。

1階全体の約4分の1を事務室スペースが占め、カウンターは利用者が入館した際に正面となる位置ではなかった。また、情報検索コーナーに10台、OPACコーナーに6台のPCが設置されていたが、データベース検索とOPAC検索専用であり、レポート作成等に必要なワード、エクセル、パワーポイント等のアプリケーションは利用できなかった。館内には会話や飲食できるスペースもなく、長時間滞在して学習するための環境ではなかった。



2004年度、2005年度の2年間をかけて開館時間を夜10時まで延ばし、また学生向けの雑誌の新規購入やガイダンスを積極的に展開する等の努力をしたにも関わらず、年々利用者数は漸減していった。図書館職員は本学学生のニーズの把握に努めるとともに、事務スペース等の縮小により利用者の利便性を高める環境の創出の必要性を痛感していた。図書館委員会での検討を経て「レポートが書けるパソコン環境」、「飲食のできるスペース」、「グループ学習のための十分なスペース」等

の環境整備への提案がまとまり、2006年度には経常費による年次計画での改修について理事会側の了解を得るに至った。そのような中、2007年6月に文部科学省が公募した学生支援GPに、図書館が計画中のプログラムが適合するのではないかとの判断のもと、学内での検討を経て、申請の運びとなった。そして、申請にあたり、学生支援GPに選定された場合には、改修工事の計画を前倒しして2007年度中に行うことへの了解を理事会から得た。学内には、図書館の静謐な環境が維持できるのか、図書館本来の機能が後退するのではないかという危惧や、学生が学生を支援することに対する危惧の声も上がっていたが、一方で、教員の中には、このような取組を積極的に支持する意見もあり、GP申請をするにいたった。

2007年9月に学生支援GPに選定され、11月からプログラムを開始し、申請時の計画通り、2007年度末の春休み中に1階フロアと2階の一部の改修工事を行い、1階は前頁の右図のような新しいフロア構成とし、2階は電子メディアコーナーを個人ブースに改修した。

2. 各スペースのコンセプト・利用状況・学生満足度

【メディアスペース】

学生がレポート等の作成をすることを想定して、ワード、エクセル、パワーポイントを備えたデスクトップのシンクライアントPCを48台(アシスタント・アイランドの2台を含め計50台)配置した。プリンターは3台あり、課金や枚数制限は行っていない。各PCの置かれた机は図書館資料等を置いて学習できる十分なスペースがある。場所は、事務室スペースを縮小してできたスペースを利用した。

基本的には1人でPCに向かって学習するためのスペースであるが、会話禁止ではなく、2~3人で利用している姿もよく見られる。2010年6月に館内で実施した学生アンケート(以下、「2010学生アンケート」という)の集計結果によると、利用目的は、多い順に「レポート・論文作成」、「課題・試験勉強」、「インターネット・メール」、「データベース・情報検索」、「グループ学習・活動」となっており、学習目的が主であることがわかる。2010学生アンケートによる利用状況、満足度は次の表の通りである。

利用状況	回答数	回答総数に対する割合	満足度	回答数	回答総数に対する割合
非常に利用している	168	24.9%	非常に満足している	133	21.3%
利用している	214	31.7%	満足している	285	45.6%
やや利用している	138	20.4%	やや満足している	147	23.5%
小計	520	76.9%	小計	565	90.4%
やや利用していない	39	5.8%	やや満足していない	44	7.0%
利用していない	56	8.3%	満足していない	11	1.8%
非常に利用していない	61	9.0%	非常に満足していない	5	0.8%
計	676	100.0%	計	625	100.0%

また、メディアスペースの一角には、AVブースが4つあり、各ブースは3人までが一緒に視聴できる。

【コミュニケーション・オープンスペース】

グループ学習のためのスペースとして1階の一番広いスペースに置かれた。会話は自由であり、貸出用のシンクライアント・ノートPCを利用し、メディアスペースと同様に、図書館提供の各種ソフトや電子資料を利用することもできる。テーブルと椅子の配置は自由に換えられるため、学生は利用の都度、グループの人数に合わせて自由に移動して使用している。プリンターを1台設置しており、課金や枚数制限は行っていない。

2010学生アンケートによると、利用目的は、多い順に「課題・試験勉強」、「グループ学習・活動」、「レポート・論文作成」、「インターネット・メール」、「読書」となっており、学習目的が主で、かつグループ学習が多いことがわかる。2010学生アンケートによる利用状況、満足度は次の表の通りである。

利用状況	回答数	回答総数に対する割合	満足度	回答数	回答総数に対する割合
非常に利用している	66	9.7%	非常に満足している	133	23.1%
利用している	150	22.2%	満足している	273	47.5%
やや利用している	152	22.5%	やや満足している	143	24.9%
小計	368	54.4%	小計	549	95.5%
やや利用していない	86	12.7%	やや満足していない	22	3.8%
利用していない	120	17.7%	満足していない	4	0.7%
非常に利用していない	103	15.2%	非常に満足していない	0	0.0%
計	677	100.0%	計	575	100.0%

【リフレッシュルーム】

図書館での学習・研究の合間に気分転換できるスペースとして置かれた。館内で唯一飲食可能なスペースである。飲食物の販売はなく持ち込みのみで、ゴミも各自持ち帰り、学内の分別ゴミボックスへ捨てることとなっている。ここでも貸出用のシンククライアント・ノートPCの利用が可能である。

学内には図書館内での飲食について悪影響を危惧する声もあったが、1階の一番奥に位置していることもあって、単なる飲食ではなく個人あるいはグループで飲食しながら学習している姿がよく見られる。

2010 学生アンケートによると、利用目的は、多い順に「飲食」、「課題・試験勉強」、「グループ学習・活動」、「読書」、「レポート・論文作成」、「インターネット・メール」、「データベース・情報検索」となっている。やはり「飲食」が一番多いものの、他の学習目的も少なくないことがわかる。2010 学生アンケートによる利用状況、満足度は次の表の通りである。

利用状況	回答数	回答総数に対する割合	満足度	回答数	回答総数に対する割合
非常に利用している	79	11.6%	非常に満足している	138	22.8%
利用している	164	24.2%	満足している	244	40.3%
やや利用している	159	23.4%	やや満足している	142	23.5%
小計	402	59.2%	小計	524	86.6%
やや利用していない	101	14.9%	やや満足していない	64	10.6%
利用していない	105	15.5%	満足していない	14	2.3%
非常に利用していない	71	10.5%	非常に満足していない	3	0.5%
計	679	100.0%	計	605	100.0%

【プレゼンテーションルーム】

小規模の発表や学内イベントに利用することを想定して置かれた。外からの視線に慣れる練習になることと、他の図書館利用者の興味を惹くことを期待して、ガラス張りとした。

スクリーン、ビデオプロジェクターがあり、ノートPCを利用してその場でデータベース検索をしながらのガイダンス等に利用されている。また教員の要望により、資料提示機を設置し、図書館資料をスクリーンで提示しながらの授業や研究会等にも活用されている。

【グループ閲覧室】

従来 3 階にあった 3 室の利用が非常に多かったため、1 階にも、元の館長室や応接室を利用して 3 室設けた。遮音性の高い部屋で図書資料を利用した密度の高いグループ学習に利用されている。ここでも、貸出用のシンクライアント・ノート PC の利用が可能である。

【個人ブース】

8 室あり、一人で集中して勉強できるスペース。ここでも、貸出用のシンクライアント・ノート PC の利用が可能である。

以上のように、改修後の「多様な学生ニーズに対応したスペース」では、個人あるいはグループで、デジタル情報と紙情報がシームレスに利用できるようになり、学生の図書館における学習環境が格段に充実した。また、4 フロアの内、1 階部分のみが新しい会話可能なスペースとなっているため、他の静謐なフロアとのゾーニングがうまくできていると思われる。

3. 書架へのガイド等（各種の取組み）

学生の多様なニーズに応えた多様なスペースへとフロア改修を行った目的は、まずは図書館の利用者増（＝入館者増）であるが、本来その目的は「図書館蔵書を活用した学習」へと学生を導くことである。

このため増加した利用者を1階での利用にとどめず、他の書架フロアへと誘う等のために次のような各種の取組みを行ってきた。とくに（4）（5）については、学生生活課、東京女子大学学会、キャリア・センターという他部署との連携をはかりながら実施した。

（1）お薦め図書ポップ（2008年度から実施）

学生が読んだ図書館蔵書の中で、他の学生に薦めたい本のポップを募集し、応募のポップ作品をコミュニケーション・オープンスペースに展示し、請求記号を明示する。

（2）学生選書ツアー選定図書の書評ポップ（2008年度から実施）

書店での学生の選書ツアーを年二回実施している。図書館の収書方針にそって各自が興味のある本を選ぶ。その中から一冊以上の書籍について書評を書き、請求記号を付したポップとして展示する。

（3）推薦図書（2007年度から実施）

専任教員の推薦図書をリストに作成して、学生たちに提供している。新規購入分は表紙カバーに請求記号を付して、コミュニケーション・オープンスペースに展示する。

（4）学生グループによる選書（2009年度から実施）

活発な課外活動を行っている学生グループから企画を募集し、それにあった書籍・資料の購入あるいは寄贈の受入れを行う。その後、カバーに請求記号を付し、コミュニケーション・オープンスペースに設けた展示コーナーで紹介する。資料の選定と展示は学生に任せている。

学生グループは、自分たちの活動を他の学生たちに知ってもらう機会と場を得ることができ、図書館としては、このコーナーの資料に興味を持った学生たちが関連の書架へと自ら足を運ぶことを期待している。これまで「ビルマの民主化」に関心を持つグループ、「フェアトレード」研究グループ、「ヤングアダルト文学」研究グループの展示を行った。

（5）キャリア・センターお薦め本（2008年度から実施）

2008年12月から、キャリア・センターと連携し、キャリア・センターの選書によるキャリア関連資料を、コミュニケーション・オープンスペースの一画に設けたコーナーに配架し、就職活動を行っている学生を支援している。

4. 滞在型図書館としての利用実態

日々の学生の利用状況を観察していると、授業の前後の動きが激しい。授業へ向かうためにそれまで使用していたノートPCをカウンターへ返却する学生、メディアスペースのデスクトップPCをログオフして出口へ向かう学生、急いで貸出手続きを済ませて出口へ向かう学生の波があり、それからしばらくすると授業が終わった学生が次々に入館し、カウンターでノートPCの貸出手続きや個人ブース・グループ閲覧室の利用手続きをする学生、2階への階段を上がって行く学生、メディアスペースやコミュニケーション・オープンスペース等に足早に向かう学生の姿が見られる。図書館が授業の合間に滞在して、学習やグループ活動をする居場所となっていることが視覚的に確認できる。

また2010年6月に館内で学生に実施したアンケート結果で、「図書館を滞在して利用していると思うか」との問いに対し、「非常にそう思う」28.7%、「そう思う」36.4%、「ややそう思う」24.5%となり、計89.6%の学生が肯定的な回答をしている。

2.でも述べた「2010学生アンケート」の結果によると、主なスペースの利用目的についての詳細な結果は以下の通りである。

利用目的	メディアスペース	コミュニケーション・ オープンスペース	リフレッシュルーム
課題・試験勉強	45.5%	37.6%	24.0%
レポート・論文作成	54.8%	21.8%	9.9%
データベース・情報検索	36.5%	5.6%	3.1%
インターネット・メール	39.2%	8.0%	4.7%
グループ学習・活動	2.9%	26.7%	16.1%
読書		7.4%	11.2%
飲食			55.5%
その他	1.5%	1.3%	2.1%

注)複数回答可としたため、上の数字はアンケート回答学生数に対する各利用目的の回答数の割合。

以上のように、それぞれのスペースの特色を生かした利用実態が見てとれる。メディアスペースでは「個人課題解決型」が特徴となっている。コミュニケーション・オープンスペースでは「グループ活動型」の利用を特徴として挙げることができよう。また、リフレッシュルームでは飲食しながらの「多目的学習型」を特徴としているようである。いずれのスペースも「課題・試験勉強」が上位の1位あるいは2位を占めていることは「学習滞在型」図書館となっている実態を反映しているものと理解している。

学生協働サポート体制

2007（平成19）11月の事業開始と同時に、ボランティア・スタッフ、サポーター、12月からシステム・サポーターが活動を開始した。翌2008年度からは、学習コンシェルジェの活動も始まり、全面实施となった。

多くの学生が学生アシスタントとして日々積極的に活動し、様々な意見や提案を出して、活動の充実をはかった結果、次の学生アンケート結果に見られる通り、毎年着実に認知度・利用度が伸びている。

学生アシスタント認知度 （回答者全体における認知の割合、単位＝％）

	2009年1月	2010年1月	2011年1月
学習コンシェルジェ	39.8	55.1	62.3
システム・サポーター	51.5	64.4	69.8
サポーター	38.4	49.4	58.8
ボランティア・スタッフ	48.5	58.1	67.4
平均	44.6	56.8	64.6

学生アシスタント利用度 （回答者全体における利用の割合、単位＝％）

	2009年1月	2010年1月	2011年1月
学習コンシェルジェ	4.7	5.6	7.3
システム・サポーター	21.5	21.1	24.6
サポーター	9.9	10.9	14.1
ボランティア・スタッフ	7.2	7.4	10.9
平均	10.8	11.3	14.2

また年度初めには、学生向けに「学生アシスタント説明会」を実施し、「マイライフ・マイライブラリー」「学生協働サポート体制」「各学生アシスタントの業務」の説明を行って参加を呼びかけている。

過去2年間の実施状況は以下の通り。いずれの日も昼休み（12:30～13:15）に昼食持参可としてリフレッシュルームで実施した。

2009年度 4月23日19名、4月24日25名、4月27日16名 計60名

2010年度 4月22日36名、4月23日24名、4月26日28名 計88名

1. 学生アシスタントの人数

2007 年度	後期	
	応募	採用
ボランティア・スタッフ	7	7
サポーター	27	10
システム・サポーター	7	7
学習コンシェルジェ	未実施	
計	41	24

2008 年度	前期		後期		計	
	応募	採用	応募	採用	応募	採用
ボランティア・スタッフ	/	/	/	/	20	20
サポーター	27	22	26	24	53	46
システム・サポーター	10	8	14	8	24	16
学習コンシェルジェ	9	5	5	5	14	10
計	46	35	45	37	111	92

2009 年度	前期		後期		計	
	応募	採用	応募	採用	応募	採用
ボランティア・スタッフ	/	/	/	/	7	7
サポーター	40	32	23	23	63	55
システム・サポーター	9	9	18	18	27	27
学習コンシェルジェ	8	8	8	8	16	16
計	57	49	49	49	113	105

2010 年度	前期		後期		計	
	応募	採用	応募	採用	応募	採用
ボランティア・スタッフ	/	/	/	/	16	16
サポーター	57	32	60	32	117	64
システム・サポーター	21	21	14	14	35	35
学習コンシェルジェ	7	7	9	9	16	16
計	85	60	83	55	184	131

2. 学生アシスタントのミーティング記録

学生アシスタントは学期毎に全体でのミーティングと業務別のミーティングを行っている。

全体ミーティングではあらゆる学年の学生アシスタントが集まるので、下級生にとっては上級生の存在・活動が良い刺激となり、また他の異なる学生アシスタントの活動内容を知ることができ、連携の一助ともなっている。

業務別ミーティングでは、問題提起や改善提案を積極的に行っている。学生アシスタントは利用者としての視点でも提案を行い、図書館の改善に協力している。

2007年度後期	
全体ミーティング	2008年1月28日(月) 14:55~16:25 学生ホール1階
出席者:	【学生】13名 ボランティア・スタッフ7名中4名、サポーター10名中5名、システム・サポーター7名中4名、 図書館職員2名
業務別ミーティング	
ボランティア・スタッフ	図書館応接室 12月17日(月) 10:55~12:25 7名中5名出席、図書館職員2名
サポーター(日程調整の関係で、2グループにわかれて実施。)	図書館応接室 12月12日(水) 16:35~18:05 5名出席、図書館職員2名 12月14日(金) 14:55~16:25 3名出席、図書館職員2名 計10名中8名出席
バンダナに代わる目印を検討	エプロン
システム・サポーター	図書館応接室 12月18日(火) 9:00~10:30 7名中6名出席、図書館職員2名
2008年度前期 (場所:リフレッシュルーム)	
全体ミーティング	6月19日(木) 18:15~19:30
出席者:	【学生】55名中38名 ボランティア・スタッフ20名中10名出席、サポーター22名中15名出席、システム・サポーター8 名全員出席、学習コンシェルジェ5名全員出席 【教職員】図書館長、教育研究支援部長、図書館課長、図書館職員1名 【司会】図書館職員
業務別ミーティング	
ボランティア・スタッフ	7月17日(木) 13:05~13:25 20名中1名出席 (4名は他のアシスタントミーティングに出席、3時限に補講が入ったため4名欠席)
サポーター	7月17日(木) 12:25~13:05 22名中16名出席
システム・サポーター	7月17日(木) 12:25~13:15 8名全員出席 提案等 ●メディアスペースの開放時間を延長して欲しい

<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館からの回答 来年度に向けて前向きに検討中。(2009 年度から 19 時まで延長した。) ・ 参加者からの意見 情報処理教室が夜遅くまで開放しているのだから、メディアスペースも遅くまで開放しなくてもよいかもしれない。制限があるのが必ずしも悪いとは限らない。もともとの静かな図書館が好きな人にとっては、気軽さだけが先行することへの危惧がある。 ● マニュアルの整備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館からの回答 システム・サポーターが受けた質問と回答をまとめたものを作る必要があると思っている。次期のスタートまでに対応したい。 ● 禁止エリアでの飲食 <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館からの回答 図書館職員もマナーキャンペーンなど注意を行ってきている。ただ、相手に分かってもらえるように注意するのは難しい。 ・ 参加者からの意見 システム・サポーターの業務で注意することも可能ではないか。液体がこぼれて PC が壊れたりするのは問題。 ● 消しゴムのカスなどの汚れが目立つが、清掃はどのように行っているか？ <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館からの回答 床などは専門業者に業務委託している。机の上などは手が回らずそのままになっている可能性がある。 ・ 参加者からの意見 何らかの体制があればよいという程度なので、システム・サポーターでメディアスペースの机の上の清掃はやれるかもしれない。
<p>学習コンシェルジェ</p> <p>7月17日(木) 17:30~18:30 5名中5名出席</p>
<p>2008年度後期 (場所：リフレッシュルーム)</p>
<p>全体ミーティング 11月13日(木) 18:15~19:30</p> <p>出席者：【学生】57名中30名 ボランティア・スタッフ 20名中5名出席、システム・サポーター8名中5名出席、サポーター24名中15名出席、学習コンシェルジェ5名全員出席 【教職員】図書館長、図書館課長、図書館職員2名 【司会】図書館職員</p>
<p>業務別ミーティング</p> <p>ボランティア・スタッフ</p> <p>2009年1月14日(水) 12:35~13:10 20名中7名出席</p>
<p>サポーター</p> <p>2009年1月13日(火) 12:25~13:05 24名中12名出席</p>
<p>システム・サポーター</p> <p>2009年1月13日(火) 12:35~13:05 8名中6名出席</p> <p>指摘された問題について、対応を協議した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● サポートの統一 <p>以下の内容については、担当者は必ず行う。マニュアルにも追加する。</p> <p>業務開始時：プリンタ用紙の残量をチェックし、必要に応じて補充</p> <p>30分毎に見回り：プリンタ用紙の残量をチェックし、必要に応じて補充</p> <p>5時限担当者のみ：</p> <p>a. PCが自動シャットダウンされる15分前(17:45)にメディアスペースの利用者に利用</p>

<p>終了とデータ保存をアナウンス</p> <p>b. メディアスペースの忘れ物調査とごみ捨て</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 報告メール <p>形式をそろえるため、記載すべき情報を入力したメールを一度全員に流す。</p>
<p>学習コンシェルジェ</p> <p>2009年1月14日(水) 11:00~12:10 5名中5名出席</p>
<p>2009年度前期 (場所:リフレッシュルーム)</p>
<p>全体ミーティング 6月18日(木) 18:15~20:05</p>
<p>出席者:【学生】42名</p> <p>ボランティア・スタッフ7名中5名、サポーター32名中25名、システム・サポーター9名中7名、学習コンシェルジェ7名中5名</p> <p>【教職員】図書館長、学生委員長、教育研究支援部長、図書館課長</p> <p>【司会】図書館職員</p> <p>提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本文学科の学生から質問が多いのは、学科の教員が学部生に呼びかけて、学習コンシェルジェを活用するように促している点が大いと思われる。他の学科の教員にも学習コンシェルジェの利用促進に協力してもらえよう、教員や図書館から働きかけて欲しい。 ● 間違えて出力したプリント用紙が、プリンタの出力口にたまる。あまりそれが多いと、利用者が出力した際に、自分のものを探すのが困難になる。リサイクルの箱を置いて、こまめにそちらに移してはどうか。 ● システム・サポーターは体制としてやっているものなので、人が違って、サービスの質は落とさないようにする必要がある。それは、2009年度前期のメンバーの期間終了後であっても同様で、マニュアルの整備が課題となる。
<p>業務別ミーティング</p>
<p>ボランティア・スタッフ</p> <p>7月16日(木) 12:33~13:10 7名中5名出席</p> <p>提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● バンダナの首巻きはやめた方がよい。首に巻いている写真を見て応募するのをやめようかと思ったことがある。(他の部位に巻いても良いという説明を受けて安心した) 広報に使用するものは、他の写真を使用するようにする。 ● 図書館の正面階段を左に曲がってしまうと、ボランティア・スタッフの位置が死角になって見えない。階段を上がったところに掲示を出してはどうか。 <p>近日中に掲示を作成する。</p>
<p>サポーター</p> <p>2008年7月15日(水) 12:30~13:05 32名中18名出席</p> <p>提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ブックトラックの音が響く。(複数) ● ブックトラックに館内利用の本を置く利用者がいるので掲示が必要。(複数)

<p>システム・サポーター</p> <p>7月15日(水) 12:35~13:15 9名中7名出席</p> <p>提案等</p> <ul style="list-style-type: none"> ● プリンタへの大量出力への対応 一時取り置きボックスを設置、不要用紙入れボックス、および「大量印刷した場合にはカウンターへ」の掲示。 ● 全体ミーティングの中で出た提案を元に、今期システム・サポーターでマニュアルを作成することを決定。
<p>学習コンシェルジェ</p> <p>2009年7月16日(木) 18:15~19:25 8名中5名出席</p> <p>提案等</p> <p>英米文学専攻の学習コンシェルジェの勤務時間(月5限)に、英米文学科または英語文学文化専攻の語学の授業(必修)が重なっているので相談したくてもこられないという状況になっているのではないかと。後期の勤務時間変更を検討</p> <p>分野が合わないと相談に来にくいようだ。机上にある専門分野別の時間割を眺めていく人は何人かいる。勤務時間中、自分の専門を大きく掲げてはどうか。(2009年度後期に対応)</p> <p>何を質問したらよいかわからない利用者もいると思うので、代表的な質問内容について掲示をしてはどうか。例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 参考文献の書き方(冊子の場合・インターネットの場合) ・ 雑誌論文の検索の仕方 ・ 現物貸借と文献複写の方法 ・ 引用の仕方 ・ 論文・レポートの形式の整え方 <p>の内容とあわせて検討する。</p>
<p>2009年度後期 (場所:リフレッシュルーム)</p>
<p>全体ミーティング 11月12日(木) 18:15~19:45</p>
<p>出席者:【学生】33名</p> <p>ボランティア・スタッフ8名中2名、サポーター23名中15名、システム・サポーター18名中11名出席、学習コンシェルジェ8名中5名</p> <p>【教職員】図書館長、図書館委員会委員(教員)、図書館課長 【司会】図書館職員</p>
<p>業務別ミーティング</p>
<p>ボランティア・スタッフ</p> <p>2010年1月13日(水) 12:40~13:10 7名中4名出席</p> <p>2009年度利用促進のために学生から出されて行った改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 2、3階の階段右側にも「ボランティア・スタッフ優先席」の掲示を追加。 ● 地下にもボランティア・スタッフ優先席を設置。 ● 図書館の様々な機能が分からないボランティア・スタッフにOPACの使い方やデータベースの使い方などのミニガイダンスを実施。 ● 地階の利用方法が分からない利用者が多いという全体ミーティングでの報告を受けて、地階の図書・雑誌の分類、PC2台で行える情報検索の方法について、ボランティア・スタッフの希望者にレクチャー実施。

<p>来年度の申し送りとして以下の件について話し合いを行った。</p> <p>利用促進期間を設置 ボランティア・スタッフ個々が希望時間に業務を行うだけでなく、卒論の期間（12月？）などにボランティア・スタッフが集中して質問を受ける期間を作ってはどうか（賛同者のみ、無理のない範囲で）</p> <p>ML 前期の業務別ミーティングで利用促進期間の設置について提案があったが、結局今期は実施できなかった。原因としてはメンバーで集まって話をする時間を取れなかったことが大きい。MLを作って意見交換を行えばもっとスムーズに新規の提案を実現したり、ボランティア・スタッフ同士の連帯感を生むこともできるのではないかと。</p> <p>目印 現在使用しているバンダナは目立たない、着用には抵抗があるとの意見がある。また、机の上に置く目印は、書架を移動しているとき机の上に置いたままなので、ボランティア・スタッフだということがわからない。大きめの名札を使ってはどうか。</p> <p>人数の確保 ボランティア・スタッフ全体の人数をもう少し多いとサービスとしての厚みがでるのではないかと。募集の掲示の出し方を工夫した方がよい。また、口コミの効果も大きいので、ボランティア・スタッフが友人に声をかけて呼び込んでいってはどうか。</p>
<p>サポーター 2010年1月14日（木）12:35～13:10 23名中12名出席 前期の業務別ミーティング、全体ミーティングで指摘された点への対応を報告。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ブックトラックの音が響く 油をさして対応 ● ブックトラックに館内利用の本を置く利用者があるので掲示が必要 対応済 ● 地階のブックトラックは2段ですぐに一杯になってしまうので、大きいものに変更してほしい。 <p>1月下旬対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 館内利用図書の返却場所が分かりにくい 小型ブックトラックへの掲示を工夫して変更済
<p>システム・サポーター 2010年1月15日（金）12:40～13:15 18名中7名出席 前期に提案のあったマニュアルを今期完成させた。今後は図書館で、抜粋版を作成しホームページに掲載する。1/15午後のシステム・サポーターに編集作業を手伝ってもらう。</p>
<p>学習コンシェルジュ 2010年1月14日（木）18:30～19:30 8名中5名出席 提案と対応 分野が合わないと相談に来にくいようだ。机上にある専門分野別の時間割を眺めていく人は何人かいる（2009年度前期提案事項） 掲示板を購入した。基本的な相談項目を列記して共通掲示とし、担当者が自分の専門分野や紹介をそれぞれ作成して、勤務時間にその都度貼り替えるようにした。</p>
<p>2010年度前期（場所：リフレッシュルーム）</p>
<p>全体ミーティング 6月17日（木）18:20～20:00</p>
<p>出席者：【学生】46名 ボランティア・スタッフ13名中9名、サポーター32名中20名、システム・サポーター21名中12名</p>

<p>名、学習コンシェルジェ 7 名中 5 名</p> <p>【教職員】図書館長、教育研究支援部長、図書館課長</p> <p>【司会】図書館職員</p> <p>意見抜粋</p> <p>ボランティア・スタッフについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 今年度より名札・腕章・ポップで勤務するようになったが、利用者からの質問はほとんどない。 ● 利用者に存在を認知してもらうため、ミーティングを開いて方策を検討。 ● 今年度よりメーリングリストを立ち上げて業務報告と情報交換を行う。 ● 前期の様子をもとに、後期に利用強化週間を実施するか検討する。 <p>提案</p> <p>メディアスペース内で消しゴムのカスを利用者自身で捨ててもらうため、ゴミ箱を設置してはどうか。</p> <p>後期より、メディアスペース、アシスタント・アイランド、個人ブースに、清掃用のミニブラシと紙製のミニゴミ箱を一つずつ設置した。</p>
<p>業務別ミーティング</p> <p>ボランティア・スタッフ</p> <p>5月19日(水) 12:35~13:05 10名中7名出席</p> <p>昨年度のボランティア・スタッフより申し送りの次の2点について検討した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● MLの立ち上げ 強制ではなく有志により立ち上げることとなった。 ● 利用促進期間の設定 前期中に ML で情報交換しながら様子を見て、業務別ミーティングで再度検討することとなった。 <p>7月16日(金) 12:35~13:15 14名中11名出席</p> <p>利用促進週間設置の目的、実施時期等について検討した。</p>
<p>サポーター</p> <p>7月15日(木) 18:15~19:45 32名中24名出席</p> <p>提案と対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リフレッシュルームの机・椅子を増やしてほしい。席が少ない。 追加用として丸椅子を10客設置しました。 ● ブックトラックをエレベータに載せる時、ガタガタと音がうるさい。 古いブックトラックは新しいものにチェンジしました。 ● 地階 400-600 番台の書架が薄暗いので、明るくしてほしい。 対応を検討します。 ● 出勤簿には学部と学科しか書けないようになっている。専攻まで書けるようにしてほしい。 後期より書式を多少変更します。 ● メディアスペースに設置されたコンピュータのマウスのボールが動かない。 消しゴムのカスが原因の一つと思われるので、後期より各机に消しゴムカス入れ箱を、4台の机ごとに刷毛を設置し、利用者自身が掃除できるようにします。マウスの新規購入はもう少しお待ちください。
<p>システム・サポーター</p> <p>7月16日(金) 12:35~13:10 21名中10名出席</p>

提案と対応

- Log Off のカードが取れやすい件
設置方法をスタンドタイプに変更
- 大量印刷について
 - (1)印刷部数制限を機械的に設定することはできないか。
現状では難しいです。
 - (2)ログインしたら注意事項が壁紙に表示されるように設定できないか。
現状では難しいです。
 - (3)印刷プレビューを必ず見てもらう。Log Off と同様のカードを作る。
後期システム・サポーターに、ログオフカードと同じタイプのものを作成してもらう
予定です。
 - (4)両面印刷を知らない利用者が多いので知らせていく。
掲示はこれ以上増やしても逆効果と思われるので、システム・サポーターが利用者一人ひとりに利用方法を案内することで徐々に周知されていくことを期待しています。
- 「PC 質問箱」の認知度を上げたい(複数)。アイコンを作ってはどうか。
PC のメンテナンスの時期に合わせて作成が可能かどうか SE と調整します。
- 学習コンシェルジェの後ろにある PC 関係の参考資料をマニュアルとして利用者に提供したい。
利用者用として複本を購入し書架に置きます。
アシスタント・アイランドから持ち出さずにその場で利用するのであれば、利用者にも使ってもらって構いません。
システム・サポーターが利用者に説明するために使うのであれば、学習コンシェルジェの席から持ち出しても構いません。
- 業務別ミーティングが 1 回だと感想だけで終わってしまうので、改善点まで話し合えない。月に 1 回集まってはどうか。
システム・サポーターの有志でミーティングを行ってください。図書館職員は入りませんので、自由に話し合っていていただいて結構です。但し、ミーティング後には報告書を提出するようお願いいたします。
- 総入れ替えの意味が周知されていないので、利用者に説明してほしい。
並ぶ位置に掲示をします。
- 総入れ替えの時間について
2010 年度後期より入れ替え時間を 14:55 に変更します。

学習コンシェルジェ

7月22日(木) 16:40~18:25 7名中7名出席

2010年度後期 (場所:リフレッシュルーム)

全体ミーティング 11月18日(木) 18:23~20:15

出席者:【学生】68名中47名

ボランティア・スタッフ 14名中7名、システム・サポーター14名中7名、サポーター32名中28名、学習コンシェルジェ8名中5名

【教職員】図書館長、教育研究支援部長、図書館課長【司会】図書館職員

意見抜粋

- <変更点> 活動中に OPAC の端末の上に「ボランティア・スタッフ勤務中」の掲示を出す(任意)。

<ul style="list-style-type: none"> ● <変更点> ホワイトボードに「ボランティア・スタッフ活動中+利用者に向けたメッセージ」を手書きして活動場所の近くに設置する（任意） ● 利用者にボランティア・スタッフを知ってもらうことを目的として「利用促進期間」を設ける。11/22(月)～25(木)の3日間行う。利用者への告知は、図書館入口の掲示や活動中のホワイトボードで行っている。 ● メディアスペースでシャットダウンされてしまう端末が多いので、前期のシステム・サポーターより提案があり、キーボードにログオフを喚起する掲示を作成し設置した。 ● 後期は無駄な大量印刷抑止のための掲示をキーボードに設置した。（ログオフの掲示は取り下げ） ● 後期になってメディアスペースの各机にブラシと紙製の小さなゴミ箱が設置された。（利用者に使ってもらうものだが）システム・サポーターがちょっと机の上を掃いてゴミを捨てるのにも便利だ。
<p>業務別ミーティング</p> <p>ボランティア・スタッフ</p> <p>10月14日（木）9:30～10:30 14名中4名出席 「認知してもらう」ための利用促進期間の実施を決定</p> <p>10月25日（月）12:30～13:13 14名中8名出席 利用促進期間の具体的な実施方法を検討（名称は最終的に「利用促進デー」）</p> <p>11月22日（月）～25日（木）利用促進デー 14名中10名参加。3日間で約47時間（1年次5名、2年次1名、3年次4名）</p> <p>11月26日（金）12:30～13:05 利用促進デー反省会 16名中9名出席</p> <p>2011年1月13日（木）12:30～13:05 16名中9名出席 活動報告書作成（web公開）</p>
<p>サポーター</p> <p>2011年1月11日（木）18:15～19:30 32名中24名出席 サポーターによって、毎回のように質問されている人とまったく質問されない人という。サポーターから勇気を出して利用者に話しかけたとしても拒絶されるケースも多い。毎回利用者対応しているサポーターにどのような特徴があるか、皆で情報共有するため各自の経験を話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 断られるケース サポーター「大丈夫ですか？」 利用者（資料を探しまわっていても）「大丈夫です」 ● 受け入れてもらえるケース ・サポーター「何か探されていますか？」 利用者「この資料を探しています」 ・目を見て話しかける。
<p>システム・サポーター</p> <p>2011年1月12日（水）12:35～13:10 14名中8名出席 提案と対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 得意な分野・項目をアシスタント・アイランドに掲示する コミュニケーション専攻の利用者に質問された内容はExcelのかなり細かい内容で、自分がコミュニケーション学科だったので対応できたが、他の専攻のシステム・サポーターだったら苦労したかもしれないと思った。システム・サポーターがそれぞれ自分の得意な分野や項目を例示すると質問をしやすいのではないか。

協議の結果、以下の内容を案とすることにした。今回のミーティングに参加しているシステム・サポーターは、全員、コンピュータⅠ以外にも情報処理科目を履修しているため、単位取得した情報処理科目名と、得意な分野や具体的な項目を例示したものを A4 で作成し、アシスタント・アイランド席に掲示する。

学習コンシェルジェ

2011年1月13日(木) 16:45~19:10 9名中4名出席

なお、学習コンシェルジェについては「4. 学習コンシェルジェの活動報告」参照。

3. 図書館職員の関わり

学生協働サポート体制は学生アシスタント自身の成長が目的のひとつになっている。図書館職員は、日々の活動における業務内容から利用者対応まで、学生アシスタント一人ひとりとコミュニケーションをとりながら成長を支援している。

年度始めに実施している「学生アシスタント説明会」では、学生に学生協働サポート体制の目的を理解してもらう。学生協働サポート体制は4種の学生アシスタントが連携しながらそれぞれの役割を果たすことで全体を形成していること、学生アシスタントは自分の役割だけに目を向けるのではなく全体像を共有し、互いの役割を意識しながら協力することを求めている。また単なるアルバイトとして決められた作業をこなすのではなく、利用者の立場を意識した対応の重要性を強調している。それにより学生アシスタントは利用者の目線と図書館の運営側に立った目線の両方から業務に当たる中で課題を見出すようになってゆく。年2回実施している全体ミーティングと業務別ミーティング(アシスタント毎)では、活動中に心掛けたこと、利用者の反応、提案等を出席者全員が発表する。学生アシスタントを既に経験している学生の意見は初めての学生にとって示唆に富むものであり、自らの活動の参考になる。更に業務中に感じた課題をミーティングやメーリングリストで仲間の意見を参考にしながら解決するという成功体験を経ることによって自身の自信と図書館や大学に対する帰属意識を培っていくようである。図書館側では実施に移せる提案には速やかに対応し、提案に障害がある場合は説明を行い納得がゆくまで話し合うことで学生アシスタントと図書館職員との信頼関係を築いている。担当図書館職員は他の職員や課長に適宜報告・相談を行っている。課長は必要に応じて図書館長にも対応の判断を仰ぐ。図書館長自ら学生アシスタントの提案に対する図書館のスタンスについて説明を行うこともある。このような対応により、学生アシスタントは自分の提案を図書館全体で受け止めているという印象を抱くようになる。

また、学生の取り組みの中でトラブルが発生した場合は、図書館職員が解決への助力を行う。例えば、サポーターが書架の仕組みを十分に理解していなかったため、利用者対応に不備があった場合は、図書館職員がサポーターと交代し利用者対応するだけでなく、落ち着いたところでサポーターにどのような対応をすべきだったかを理解してもらうために図書館職員とサポーターと一緒に書架をまわる。そのことでサポーターは実体験として図書館の利用方法を理解し、次の利用者対応に自信を持てるようになる。

別の例では、「図書館だより」の作成でリーダーになった学生が締め切りと質の高さを意識するあまり、遅れている仲間の作業についてメンバー間でうまくコミュニケーションを取れず、仲間の作業を切り捨てようとする場面があった。こうしたケースでは図書館職員が関係者一人ひとりと話をし、「マイライフ・マイライブラリー」の目的が協働にあることを再認識させ、難局を皆の絆を深める好機に変えることの大切さについて気付かせるよう導いた。その結果、リーダーはメンバー全員を集め謝罪をした上で、お互いに誤解や行き違いがあったことを確認し合い、皆で協力して残りの仕事の再分担を行って「図書館だより」の完成を迎えることができた。リーダーは自身がこの機会に大きく成長したことを皆に語り、メンバーにとっても貴重な経験になったと思われる。

図書館職員は成長のスピードと度合いを学生アシスタント自身に委ねながら見守ることが重要である。本人が納得・吸収するまでの時間を充分取らずに、速さや大きさだけを重視すると成長は形だけのものになる。例としてボランティア・スタッフの「利用促進デー」の取組みが挙げられる。ボランティア・スタッフは当初より利用者からの質問が少ないことを大きな課題と考えていた。ボランティア・スタッフは活動時間を各自が自由に決めて良いので、利用者から見るといつでも当てにできるアシスタントではないため、やむを得ない面がある。打開策として2009年度後期業務別ミーティング

で提案された企画が「利用促進デー」の実施である。2010年度になって具体的な話し合いを開始したが、報酬のないボランティア・スタッフがそれぞれの授業の合間を縫いながら一定期間の全授業時間に活動できるものか、やったところで成果が出るのかという不安を抱えながら4回のミーティングを重ねた。その間、ボランティア・スタッフはメーリングリストを立ち上げて、利用者の様子、在席人数、資料を探しているかどうかなど利用者ニーズの把握に努め、情報交換を行った。また、あまり綺麗でなくても良いので、手書きで「ボランティア・スタッフ活動中。利用促進デー実施します！」とホワイトボードに書き傍に置いて活動すると、書いている姿も含めて図書館の中の目立つ存在として利用者に認知してもらえないかなどの提案も出された。一方でミーティングの場に来ない仲間のことを常に気遣いながら、「利用促進デー」の目的を「利用してもらうことよりも、まず利用者存在を知ってもらうこと」に決定し、皆が参加しやすい参加形態や期間設定について丁寧に議論し、卒論制作の時期（11月）に3日間（全授業時間）、1コマ当たり1人以上という最も無理のない範囲での実施を決めた。この間の図書館職員は、ミーティングに参加し必要な情報提供を行いながら、メンバーの気持ちが徐々に高まり揃っていくのを見守っていた。そして、容易に解決できない問題に取り組む場合、試みそれ自体にも意味があること、協働の楽しみを皆で共有することも成功のひとつの形になりうることについて、ボランティア・スタッフの歩みに合わせて要所でアドバイスを行った。「利用促進デー」は、積極的に新しい提案を行う者から1回活動するだけの者まで人によって取り組み方は様々だったが、「利用促進デー」が目的意識の高い数人だけの企画に終わることなく、工夫しつづなしたことは参加者全員の成果と思われる。

このように、コミュニケーションを通じ、学生が周囲と信頼関係を築きながら働く喜びを感じるという実体験を図書館では重視している。そのことが学生の自発的な成長を促し、他のアシスタントの成長を支援するという良い循環を生んでいくと考えている。

4. 学習コンシェルジェの活動報告

学習コンシェルジェの活動は2008年度前期から開始したものの、初年度の利用者は少なく、マイライフ・マイライブラリー運営委員会での検討に加え、学習コンシェルジェの学生自身も改善に向けて種々の努力を重ねた。その結果、2009年度からは利用者が格段に増加し、また相談内容も多岐にわたってきた。

このような流れの中、発足当初から学習コンシェルジェとして協力してくれた学生や卒業にあたって学習コンシェルジェの活動から離れる学生から、活動についての感想や報告が出されている。以下は、それらからの抜粋である。

2008年度前期～2010年度前期まで活動した博士後期課程の学生

活動についての感想、留意した点、工夫した点等

2008年度

学習コンシェルジェ初年度ということもあり、学部生の中に活動自体がなかなか浸透しない様子だった。掲示やホームページを用いて積極的に呼びかけを行っていたが、学習コンシェルジェの活動内容が学生にとって不透明であったことが利用者伸び悩みの原因だったように思われる。

学習コンシェルジェとしての勤務においても、最初是对応などに慣れておらず、声をかけられるとあわてがちになってしまうこともあった。個人的には、利用者のいないときに図書館作成のマニュアルを熟読し、利用者対応に備えていた。初めて質問を受けたときには、具体的な書名が出てくるなど、専門外の質問や、想定していた一般的な質問以外にも柔軟に対応する必要性を痛感した。曜日ごとに常駐している学習コンシェルジェの専門分野を記した表を掲示するようになったことは、利用者にとってさらに利用しやすくなるきっかけとなったと思う。

2009年度

2009年度学習コンシェルジェは、月曜日から金曜日のお昼休みを挟んだ時間帯 12:25～13:55 と、5限の16:35-18:05の各時間帯に活動した。初年度(2008)と比べて飛躍的に利用者が増えた。また、質問内容も初歩的なものから専門的な内容までと多岐に渡り、利用者自身がアドバイスを求める学習コンシェルジェを選ぶようになったと考えられる。各学習コンシェルジェの活動報告を概観すると、レポートの書き方や構成の立て方、資料の探し方に関する初歩的な質問から、専門的な分野に関するもの、後期には卒業論文に関する相談までと、幅広くなってきたことが見て取れる。専門分野の質問については言うまでもないが、自分がかつて学部生のとき抱いていた不安、その解決法など、経験者だからわかることを活かす方法を徐々に学ぶことができいったように思う。卒業論文に関する質問では、回答できる範囲について戸惑いもあり、また自分が書いた時から形式等変わっているため回答できないこともあったが、図書館側のきめ細かい対応のおかげで、自分なりの対処法を見出すことができた。

2009年度は上記質問のほか、メディアスペースの利用者からパソコンに関する質問が多く寄せられた。内容は、印刷ができない、ログインできない、といったようなものである。当初は、システム・サポーターとの仕事の区別をするためにも、すぐに事務室へ引き継いだほうが良いのかと思っていたが、私の勤務時間帯はシステム・サポーター不在であったため、対応できる範囲で回答していた。メディアスペースの質問を受けることは2008年度もあり、並んだ座席配置による混同でもあるのだが、一方で、学習に関する質問ではなくても、メディアスペースでの疑問をアシスタント・アイランドに持ってくるという一連の流れが定着しつつある表れであり、学生アシスタント制度にとって大変良い動きだと思った。

2年目の利用者増加の直接的要因として、主に次の3点を挙げるができるだろう。まず、先生方のご尽力のもとに、学部生への学習コンシェルジェの活動が浸透してきたことが大きい。ゼミなどで呼びかけを行っていただくことにより、ゼミ生の利用が促進された。次に、2008年度はお昼のみだった勤務時間をお昼と5限の2つの時間帯に増やしたことも、学生が利用しやすくなった要因と考えられる。

加えて、2009年度導入した新入生オリエンテーション及び各種ガイダンスの効果が大きい。オリエンテーションでは、年度初めに1年生に対して学習コンシェルジェや学生アシスタントのサポート体制について紹介する機会を設けることができた。また、2009年度から、通常勤務に加え各種ガイダンスも担当するようになったことで、学習コンシェルジェの活動の幅はさらに広がった。ガイダンスは内容によって、「情報検索ガイダンス」と「基本的なレポートの書き方ガイダンス」の2タイプに分けられている。いずれも図書館の利用や、各自の学習に関する基本的な助言をするというところでは根本は同じである。実習を含まない「基本的なレポートの書き方ガイダンス」は90分間で行うため、冗長になりがちであるが、配付資料を穴埋め式にするなど工夫をこらし、学生自身に積極的にガイダンスに参加してもらえるようにした。また、随所に図書館利用に関する情報、著作権や複写に関すること、検索ガイダンスと重複するけれど重要な情報などを織り交ぜることで、図書館での自主的な学習活動を推進するよう心がけた。

ガイダンスには自分自身の経験談を入れたり、自分が学生のとときに知っていたら役立つだろうと思う知識を要所に差し挟んだりして、親近感を抱いてもらえるようにした。「基本的なレポートの書き方ガイダンス」は対象が1年生だったため、まだレポートを書いたことのない学生にとっては実感のわきにくい部分もあったかもしれない。しかし、実際に書いていく際に、ガイダンスで聞いた内容を思い起こして役立ててもらえるようになると思った。「情報検索ガイダンス」では、専門領域の知識を活かし、有用な媒体の紹介を行うことができた。また、新たなデータベース活用法を知るきっかけにもなり、私自身勉強になった。

これらの活動内容の増幅と並行して、図書館と連携して活動を推進してきた。随時図書館職員とミーティングを行い、利用者を増やすために改善すべき点を話し合った。その中で、アシスタント・アイランドという勤務場所が人目につきやすく利用しにくいのではないか、メディアスペースの一角にて活動してみるのはいかがでしょうか、という案が出された。しかし一方で、活動が浸透し始めたこの時期に場所を移動しては却って混乱を招きかねない、相談している様子が見えることで逆に利用者が声をかけやすくなるのではないか、という意見も出たことで、場所を固定して様子を見ることとなった。また、コミュニケーション・オープンスペース内で話し合っている学生にこちらから声をかけてみるのはいかがでしょうか、という案も出されたが、学生同士で解決法を見出している様も見受けられることから、働きかけは行わない方向で意見がまとまった。また、学習コンシェルジェ勤務表に加えて、座席の傍らに立て看板を設置し、各学習コンシェルジェが作成した担当日時や専門分野を記載したポスターを勤務時間中に掲示するようにした。これにより、通りがけにポスターを確認していく学生も増え、視覚的に訴えかける効果をもたらしたと考えられる。さらに、勤務場所に論文の書き方などに関する書籍を配置したことで、書籍に関心をもって立ち止まる利用者もいた。

2010年度前期

2010年度は、月曜日から金曜日の12:25～13:55と3限～5限の各時間帯に活動した。年々増加傾向をたどってきた利用者数であるが、2010年度は年度初めからさらに活発な様相を呈した。

2009年度と比較すると、学習コンシェルジェの存在が学部生にとってかなり身近なものになってきたように見受けられた。活動を始めたころは、アシスタント・アイランドに座っていることが珍しく見えたようで、通りすがりに好奇の目で眺められることもしばしばあり、実際に利用するまでの距離

があった。しかし、2010年度は通りすがりに立ち寄ってもらえるようになり、より気軽に利用してもらえようになったと感じた。

その大きな要因としては、2009年と同様、4月の新入生オリエンテーションでのアナウンスや、各種ガイダンスの効果が挙げられる。各ガイダンスのなかでも学習コンシェルジェの業務についてのアナウンスを行っており、実際にガイダンスの後に相談に訪れる学生もいた。また、学習コンシェルジェの活動日時が増えたことも功を奏した。

以上の活動内容の推移からも明白であるように、2008年度には認知度が極めて低く、利用者が伸び悩んでいた学習コンシェルジェの活動は、学部生へ浸透していくにつれ利用者増加の一途をたどった。年々学習コンシェルジェの活動内容にも幅が生まれ、オリエンテーションやガイダンスを通じて、さらに活動が活性化していった。

活動の範囲が広がることは、同時に私自身にとって、試行錯誤の連続でもあった。卒業論文に関する質問や、授業内容に直接かかわってくる相談では、いかに成績に反映しない程度での回答を行うか、利用者が解決の糸口を見つけられるような助言にとどめるのか、といったことを毎回思索しながら勤務に臨んでいた。もちろん、最初から適切な助言が行えていたわけではない。折に触れて、図書館職員とコンタクトを取り、必要に応じてミーティングを行い各学習コンシェルジェとの意見交換を行う中で、改善点を見出し、勤務に反映していったことが相乗効果を生んだと考えられる。学習コンシェルジェが飛躍的な進歩を遂げることができたのも、ひとえに図書館職員の厚いサポート体制のおかげである。未筆ながら、厚く御礼申し上げる。

今後の活動について（提案事項等）

今後の学習コンシェルジェへの期待は、非常に大きい。過去の活動で得た実績を礎とし、ガイダンスをはじめ種々の活動内容を充実させていってほしい。

ガイダンスについては、学習コンシェルジェと学部ゼミとの日程調整が困難とは思いますが、なるべく専攻と同じゼミのガイダンスを担当できると良い。専攻が異なると、レポートの書き方や検索で用いるデータベースも違ってくるためである。専門分野であると、自らの経験を踏まえた有用な情報を付け加えることもできる。加えて、勤務分担表を図書館の他のスペース（メディアスペース、リフレッシュルーム、2,3階など）にも貼り出すと、勉強中に疑問があったときに利用しやすくなるかもしれないと思う。

学習コンシェルジェは大学院学生であり、各々の研究との兼ね合いも時には大変なこともあるだろう。しかしながら、学習コンシェルジェは、経験や知識を活かし、役立てることができ、また勤務から学んだことを自分の糧にもできる非常に有意義な活動であると思う。2年間勤務した私は、利用者との対話を通し、コミュニケーション力を養うことができ、ガイダンス実施を通して、伝わりやすいプレゼンテーションの仕方、言葉の選び方、時間の効果的な使い方などを学ぶこともできた。

利用者のみならず、学習コンシェルジェにとっても実りの多い本制度は、さらなる相乗効果を生むであろうことが期待される。

2008年度前期～活動中の博士後期課程の学生

学びの場としてあるために 学習コンシェルジェという経験

2010年度で本学図書館での「マイライフ・マイライブラリー」の補助事業期間が終了する。幸運にも、初年度(2008)から継続して学習コンシェルジェの業務に参加することができた。月日を重ねながら、少しずつ、学生の中に学習コンシェルジェが浸透してゆく様を見てきたが、思い返すと、初年度はやはり利用者数が少なく、どのようにしたら学習コンシェルジェの存在を広めることができるかと、図書館職員の皆様とも頭を悩ませていたことを思い出す。お知らせを掲示したりもしたが、先生方(報

告者の指導教員の先生方)が授業においてアナウンスしてくださったことも、利用者の増大に繋がる要因のひとつであったと思われる。先生方が授業の課題を出される際に、学習コンシェルジェの利用を勧めてくださったことでその存在を知り、質問に訪れる。そして、その学生がまた別の機会に再度、利用するということが度々みられた。また、利用した学生からの話を聞いた別の学生が訪れるという、友人間での広まりというパターンも多くみられた。これらは、初年度(2008)に限ったものではなく、その後も今日まで続けて同じような傾向にある。

近年では、年度初めに行う新生へへの図書館ガイダンスを始めとして、学習コンシェルジェが情報検索ガイダンス等を担当するようになった。それによって、在学生在が学習コンシェルジェを直接に知る機会が増え、ガイダンスを受けた学生が後に学習コンシェルジェを利用するという傾向もみられた。学習コンシェルジェを担当している院生本人の顔を知ることによって、学生も心理的に利用しやすくなったと推測される。

報告者が学習コンシェルジェを担当する際に、とくに気をつけていたことが以下の三点である。まずは、利用者の質問の意図を正確に見極めることである。利用者の質問の内容が漠然としていること度々ある。そのような際には、利用者との会話を通して共に考えたり、利用者から言葉を引き出したりとするように心がけた。利用者に投げかける言葉を選びながら対応することは、報告者がTAの学習補助として行っていた卒業論文指導補助においても求められるものであり、自身にとっても学ぶことが多くあった。

二つ目は、とくにレポートなどの授業課題に関わる質問の場合の対応である。時に正解そのものを求められることがある。そのため、課題に関する質問の際には、初めに個人的な意見を伝えることはできないことを伝えたくて、情報検索の方法や、参考にするべき文献などのアドバイスを行うように心がけた。学習コンシェルジェはあくまでも補助機関であり、どこまで情報を伝えるかという点は、質問の内容が幅広くなってきた今日においても問題となることである。

そして、三点目が、学生に対応する際の姿勢である。どのような質問であっても、笑顔できめ細やかに対応することを心がけた。質問の内容に直結しないことであっても、その後の課題などにおいて知っておくべきと思われることは、こちらから積極的に伝えるようにした。レポートや演習での発表は、卒業論文に向けての練習の場でもある。そのため、情報検索と収集の仕方、問題設定、分析方法、論の整合性についてのアドバイスは、とくに詳細に伝えるように努めた。また、情報検索は新しい方法が頻繁に加わるため、報告者自身も図書館職員の方にお聞きして学ばせていただいた。

自身の専攻ではない質問を受けた場合は、一般的なことのみ伝えることもある。利用者と同じ専攻のコンシェルジェがいる場合は、そのコンシェルジェの担当日時を伝えるが、全ての専攻が揃っているわけではない。そのような際は指導教員や専攻の研究室に尋ねるように伝えることで対応した。

「学習コンシェルジェは、人とのふれあいの場である」、これが学習コンシェルジェを経験した報告者の率直な感想である。利用者の多くが報告者自身の後輩であり、学習コンシェルジェ以外の場でも声をかけてくれることが多々ある。先に受けた質問内容に関する話や、新たな質問を受けることもあり、それが再度の利用に繋がることもあった。また、先生方や図書館職員の方々のお力のもとに、学生である私たち学習コンシェルジェが安心して活動に専念できたことも忘れてはならない。

近年では、学生たちの学習態度に変化がみられる。この問題は、学習コンシェルジェの業務範囲を大きく越えるものである。「マイライフ・マイライブラリー」の補助事業期間が終了した後、いかに学校全体でこの取り組みを続けてゆくかも今後の課題となるだろうが、本学の学びの場として、学習コンシェルジェがその一助となり続けることを切に願い、今後も活動に取り組んでゆきたい。

2008 年度前期～活動中の博士後期課程の学生

学習コンシェルジェの役割は、相談者に「答え」をお教えするものではありません。「考える手助け」をすることです。本を探したい・レポートの書き方を知りたいなら、その方法をお教えし、論文の内容について意見を求められているなら、じっくりと聞いて論の進め方や考え方を一緒に模索することになります。

しかし、質問にみえるとき、相談者御自身が、知りたいと思っていること・考えたいと思っていることを、明確に理解してらっしゃることは少なく、もやもやした疑問という程度にしか把握されてない場合がほとんどです。そのため、質問を受ける際には、質問内容をよく聞きながら、相談者が知りたいことは何なのかを探る必要があります。

相談者のお役に立てたか、自信がないため、どうしても自分の身に照らした感想になってしましますが、それは結果として、私自身の「考える技術」を磨く経験にもなりました。聞く力を養えること、質問する（相談者の立場からも、相談を受けて相談者に尋ねる立場からも）コツを習得できることなど、学習コンシェルジェの経験は、得ることばかりです。

また、利用する立場から考えると、一般的な図書館は、本や資料を入手する中で、自力で答えに辿り着かなければなりません。

しかし学習コンシェルジェを置く本学では、学生たちが、本や資料、インターネットなどの各活用ツールを利用しながら、同時に他者に質問できる場が設けられていることになります。先生方に何う一步手前の、あわあわとした質問をぶつける相手を得られることも、利点だと思えます。「答え」を教えてくれる何でも屋ではないため、もどかしく思われる利用者もあるかもしれませんが、考え方や調べ方を知る手立てや、考える手助けを得る場が用意されていることは、実はとてもありがたいことなのではないでしょうか。

未だ学生である我々が学習コンシェルジェとして活動できるのは、図書館職員の皆様のご理解とご協力があったことです。ご不安に感じられる点多いと思われる中、信頼し、自由に活動させて下さいますこと、また、活動をサポートし、常に細やかなご配慮をいただきますことに、心から感謝しております。

2009 年度前期から 2010 年度後期まで活動した修士課程の学生

今回で、私の業務は最後となりました。学習コンシェルジェを 2 年間にわたり勤めさせていただき、多くのことを学びました。

私自身が専攻している分野についてのみならず、他分野からの質問をお受けする中で、対話することの豊かな成果を、他ならぬ私が得ることができたと思っております。質問を受けつつ、そこでいろいろなお話をお聞きすることができました。また、利用者の方に答えを教えず、考えていただくよう促すという方法は、これから教職につく私にとって、非常に有効な研修となっていたようにも感じております。

学習コンシェルジェの業務の有益さについては、もっと広く学生に、また先生方にも知っていただけたらと思います。通常の活動はもとより、2 つのガイダンスも本当に素晴らしいものだと思います。私は修士論文を書きながら、また卒業論文の質問を受けながら、「基本的なレポートの書き方ガイダンス」の内容を何回も反芻することになりました。90 分にまとまったガイダンスでありながら、考察を深め、表現するという行為において、普遍的な内容が詰まっていることに改めて気がつきました。

業務にあたり、常に細やかであたたかなサポートをしてくださった職員の皆さまに、心より感謝致します。学習コンシェルジェの業務においては、マニュアルを守りつつもそれぞれの対応に個性が生じるものと思われませんが、私の対応方法にも深いご理解を示していただき、本当に心強く感じており

ました。

また、学習コンシェルジェの皆さまにも感謝致します。この業務を通じて親しくお話をさせていただけるようになったことは、大学院の生活における大きな収穫でした。また、皆さまの業務報告を読むことにも、非常に勉強させていただきました。ありがとうございました。

学習支援プログラム

マイライフ・マイライブラリーの事業展開において、学生の大学での学習を支援するための各種のプログラムの提供も行っている。初年次学習支援を目的としてプログラムを開始し、他部署との連携をはかりながら就職活動の支援等のプログラムも行ってきた。

ここでは学習支援プログラムの内、「ガイダンス」と「基礎的日本語能力養成講習」を中心に述べたい。「ガイダンス」については担当教員の評価および学習コンシェルジェの感想等にも詳しく触れる。「各年度の活動実績」に記載の通り、他にも「コンピュータと携帯電話による自習システム」の提供を行った。

1. プログラムの見直し

2007年度及び2008年度の「図書館情報リテラシー教育プログラム」は、ある程度の評価が得られたものの、本学学生のニーズに合わせるため、見直しを行う必要が生じてきた。

そこで2009年度からの新学部学科構成・新教育課程への移行を考慮し、マイライフ・マイライブラリー運営委員会内の「学習支援作業部会」が、学習支援プログラムの見直しを検討した。その結果、2009年度からは次のような内容で実施することとした。

- 図書館における学習支援と正課教育との連携を強化するとともに、本学がより主体的にマイライフ・マイライブラリーの事業を継続していくことをめざし、外部講師派遣の業務委託を中止する。
- 「情報リテラシー講習」という名称は学生にわかりにくいいため使用しない。「情報検索」ガイダンスと「基本的なレポートの書き方」ガイダンスとして実施する。
- 学習コンシェルジェの能力・専門性をより生かし、学習コンシェルジェへの相談増加も期待できるため、「情報検索ガイダンス」と「基本的なレポートの書き方」ガイダンスを図書館職員だけではなく、学習コンシェルジェも担当する。
- 基礎的日本語能力養成については、本学非常勤講師経験者等を講師に選定して実施する。

とくに学習コンシェルジェがガイダンスを担当することにより、学習コンシェルジェのプレゼンテーション能力を伸ばす機会になったとともに、学部学生が学習コンシェルジェに気軽に質問するきっかけとなった。身近な先輩から資料の探し方等の説明を受けることにより、「指導される」というよりお手本にすることで図書館を利用した大学生としての学習方法を身につける良い機会になっていると思われる。

2. ガイダンス

(1) 情報検索ガイダンス

見直し後の2009年度からの実施状況は以下の通りである。

[2009年度実施状況]

随時受付(前期:32回、後期:16回)

(単位:人)

2~3年次 / 学科単位

哲学	0
日本文学	87
英米文学	95
史学	16
社会	34
心理	123
数理	27
コミュニケーション	83
地域文化	32
言語文化	80
合計	577

1年次 / 専攻単位

哲学	0
日本文学	0
英語文学文化	0
史学	0
国際関係	24
経済学	19
社会学	65
心理学	88
コミュニケーション	109
言語科学	0
数学	0
情報理学	0
その他	10
合計	315

その他:外国人留学生に対して実施したガイダンス

[2010年度実施状況]

随時受付(前期:40回、後期:17回)

(単位:人)

修士課程

哲学	0
日本文学	20
英米文学	0
史学	0
社会	0
心理	0
理学	0
現代文化	0
合計	20

3~4年次 / 学科単位

哲学	0
日本文学	140
英米文学	161
史学	28
社会	40
心理	0
数理	0
コミュニケーション	14
地域文化	36
言語文化	124
合計	543

1~2年次 / 専攻単位

哲学	0
日本文学	0
英語文学文化	0
史学	0
国際関係	61
経済学	46
社会学	47
心理学	103
コミュニケーション	164
言語科学	72
数学	0
情報理学	0
その他	10
合計	503

その他:外国人留学生に対して実施したガイダンス

(2)「基本的なレポートの書き方」ガイダンス

見直し後の2009年度からの実施状況は以下の通りである。

[2009年度実施状況]

随時受付(前期6回、後期1回)

(単位:人)

1年次 / 専攻単位

哲学	0
日本文学	0
英語文学文化	0
史学	0
国際関係	0
経済学	21
社会学	65
心理学	87
コミュニケーション	0
言語科学	0
数学	0
情報理学	0
合計	173

上記の他に、学習コンシェルジェをしている大学院学生に対して実施したガイダンス1回(参加者2名)

[2010年度実施状況]

随時受付(前期4回、後期3回)

(単位:人)

3~4年次 / 学科単位

哲学	0
日本文学	0
英米文学	0
史学	0
社会	13
心理	19
数理	0
コミュニケーション	0
地域文化	7
言語文化	0
合計	39

1~2年次 / 専攻単位

哲学	0
日本文学	0
英語文学文化	0
史学	0
国際関係	0
経済学	0
社会学	12
心理学	99
コミュニケーション	0
言語科学	0
数学	0
情報理学	0
合計	111

(3) 授業担当教員の評価、学習コンシェルジェの感想

授業担当教員アンケート

担当授業・ゼミの受講者に(1)(2)のガイダンスを受講させた教員にアンケートを実施した結果は以下の通りである。

【2009年度】

Q. 必要な情報が提供されたか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 十分であった	36	7
B) 普通	2	0
C) 不十分	0	0
合計	38	7
Q. 学生たちが理解しやすい内容であったか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 理解しやすかった	31	5
B) 普通	7	2
C) 理解しにくかった	0	0
合計	38	7
Q. 時間配分は適切であったか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 適切だった	30	6
B) 普通	6	1
C) 不適切だった	2	0
合計	38	7

「ガイダンス実施の効果(受講生の変化)」についての記述回答からの抜粋

- 情報検索をして資料を調べて準備したり、地下で紹介した参考書を引用する学生が昨年より増えた印象がある。自分で実際に目的の本を検索した後に、書架へ行って本の場所を本人が確認できたことが、とても良かったのではないかと思います。
- ガイダンス後に課題を出し、テーマに沿って資料をさがしてレポートするよう求めたところ、ガイダンス後だったのでスムーズに選書していた。
- 学内にない資料の閲覧手段を知り、1年生(前期)としては十分に文献を見つけ、それを活かした発表を行っている。
- 今まででは OPAC を使うくらいでしたが、検索で参考になるものがいろいろ見つかри、自主的な動きにつながっているようです
- ガイダンス後、一週間のあいだに、ゼミ生の60%が自分自身で検索を行なったということです。これは、素晴らしいことだと思います。

【2010 年度】

Q．必要な情報が提供されたか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 十分であった	48	4
B) 普通	2	0
C) 不十分	0	0
合計	50	4
Q．学生たちが理解しやすい内容であったか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 理解しやすかった	46	3
B) 普通	4	1
C) 理解しにくかった	0	0
合計	50	4
Q．時間配分は適切であったか		
	情報検索	基本的なレポートの書き方
A) 適切だった	48	4
B) 普通	2	0
C) 不適切だった	0	0
合計	50	4

「ガイダンス実施の効果（受講生の変化）」についての記述回答からの抜粋

- 先行文献を調べる際、ガイダンスで得た情報を活用している。効果「大」である。
- 研究論文を直接手にとることがほとんどない学生たちでしたが、授業内で、関連文献を各自さがして来るよう指示をしても自分でさがせる、と自信が少しついたようでした。あとは回数を重ねるのみですが、しっかり手がかりを得られたと思います。
- 実施後アンケートをとりましたが、大変好評でした。ネット利用の方法が、説明者自身の具体例をまじえて語られたので、理解がすすんだようです。その後、図書館のネット情報と図書との両方を使って解決に至る課題を出しましたが十分な手応えを感じました。学習コンシェルジェさんとも仲よくなれて、その後の利用につながっています。
- 前期中に、卒論の為の文献目録と研究略史を書く課題を出しましたが、利用するネット情報が去年の学生と比べて明らかに多様化し、充実した提出物となりました。
- 2週間後に和雑誌を1冊とり出して来るアサイメントを出した所、半分は自立してできたが半分は(おそらく)再度教えていただきに図書館にいったと思います。気軽にききにいくという体験となってこれはこれで良かったと思います。
- 一年次演習の文献調査課題や、ミニ調査課題において図書館を利用するグループがふえたので、効果があったと言えます。
- 図書館利用率 up や自分で検索することをいとわなくなる効果等、大変に大きな効果があります。とくに“こんなことが可能”という具体例を示して頂けることで、その後の学習にとっても資料調べや各種情報収集に大いに役に立ちます。
- ゼミの発表の際、しっかりと先行研究となる基幹論文を探せるようになった学生がいます。本当に効果が絶大です。
- ゼミ発表前にガイダンスをおこなっておいたために、実際に発表の順番が来るとどこでどのよ

うに調べたらよいかと学生たちなりに習得できていた様子である。又、CD-ROM による新聞記事検索の方法を教えて頂いたおかげで、各々発表のテーマに添った内容に合う資料を見つけ、発表に活かしています。

- 学期末のレポート提出の際にガイダンスとその後の経験について感想を出してもらいました。学年別には、
 - ・2年生は、1年次のガイダンスで説明を聞いたまま使う機会もあまりなかった図書館の様々な機能について自分に関わりのある存在として意識することができ、図書予約等が思っていたよりも簡単にできることを知って、図書館を活用することで自分の大学生活が大きく変わっていきだろと感じたそうです。
 - ・3年生は、OPAC で知っている図書の所在を確認する等はしていたけれども、キーワードでの検索、OPAC 以外の検索や情報収集方法について、新しい情報を得ることができて、今後活かしていけそうとのことでした。
- ともに、OPAC の画像クリックで Amazon に飛べること、複数のキーワードや「件名」で領域を探っていくこと等は、この機会に学ぶことができたととても良かったと好評でした。

学習コンシェルジェの感想

ガイダンスを担当した学習コンシェルジェには、実施後「ガイダンスを担当して自分が得たもの」、「受講者(後輩)の反応」、「全体的な感想・提案」について回答してもらっている。以下はその回答からの抜粋である。

【2009 年度】

「ガイダンスを担当して自分が得たもの」

- OPAC の使い方を基本から通して確認できました。Web 上の OPAC のページやデータベースのページを、自分の研究とは関係ない部分まで見たことで、全体を把握でき、とくにデータベースのページの使いやすさは新たな発見でした。
- 90 分のガイダンスの準備の中で、時間配分や構成等の組み立て方を学ぶことができました。

「受講者(後輩)の反応」

- 月曜の 1 限であるにもかかわらず、大部分の受講生が終始、熱心に注意を向けてくれました。また、随時レジュメにメモをとる様子も見受けられました。ほとんど全員が、これからはじめてのレポート作成に臨まれるようでしたが、関心を持ってもらえたようでした。
- 全体的に、熱心に聞き入っていました。レジュメに沿った説明ではなかった上に、続けてかなりの情報をご紹介したので、わかりにくい点もあったかと懸念しましたが、必要な個所は各自メモをとっており、実習ではそのメモを参考にいろいろと試していました。Google 検索のドメイン指定や Amazon へのリンク、データベースでは新しい論文を入手できるということ等は、とくに反応が良かったように思います。実習ではブラウザのページ検索機能も有効活用している様子が見られました。

「全体的な感想・提案」

- 大学の図書館が地域の図書館や本屋、インターネットとは異なり研究や大学での勉強に必要な図書雑誌を絞り込んで所蔵してある、という点をガイダンスの初めに言うとうわりやすかったかと

思いました。今回、最後のまとめに先生がこの点を強調されていて気がつきました。

- ガイダンスの途中や最後に先生に補足説明をお願いすると、活気もでますし、学生も自分の勉強に直結してわかりやすいかと思いました。
- それぞれのガイダンスで、私たちが学習コンシェルジェであることや学習コンシェルジェの案内をすると、学習コンシェルジェの業務を浸透させることができるのではないのでしょうか。
- レジュメを穴埋めにしたことは効果的だったようです。
- 先生から質問を受けましたが、ガイダンス中あるいは、ガイダンス後に先生からのコメントや補足等をいただくと、受講生にも緊張感が生まれるので良いと思いました。
- 今後、レポート課題が出される時期にさしかかったら、レポートを書いてみてどうだったのか、実際にどのような課題が出ているのか、等最初に聞いてみるとより親近感を抱いてもらえるのではないかと思います。
- 今回、最後に回答を配布しましたが、ガイダンスの中で大方書き写せていたようでした。少し書き出す文章が長いときは、長めに時間をとると良いです。もしかしたら、全体に回答を配布しなくても大丈夫かなという感じもしました。この点は、今後、検討していくといいかと思います。
- ガイダンスを重ねるにつれ、レジュメの内容を一部まとめる等、どんどん分かりやすく発展していければ良いなと思います。
- 最初の回はやらなかったのですが、2回目から実習のときにいろいろなデータベースを少しずつ試してみるように勧めたらとても効果的にいろいろ調べていて、この方法は有効だと思いました。どのデータをどう扱ったらよいのか、聞いているだけでははっきりしないのかと思います。こちら、特徴をしっかりと伝えることが必要でした。次の機会にはこれを生かしていきたいとおもいます。

【2010年度】

「ガイダンスを担当して自分が得たもの」

- ガイダンスを担当するに当たり、OPAC、CiNii、MAGAZINEPLUS、WebcatPlus等の相互の違いを整理することができました。今回のガイダンスは、使い方をお教えする、という機会を与えられることで、普段何となく使用しているものを整理してみるよいきっかけとなりました。
- 私の説明後の実習で気づいたことですが、受講者の方の中には東京女子大学図書館のHPのどこからデータベースを見るのか知らなかったという方もいらっしゃいました。説明の段階でお知らせしたつもりではありますが、基本的な事項も落とさずに、丁寧にお話する必要性を感じました。3年次になったばかりの方は雑誌論文の検索を初めてする方がほとんどだと思いますので、その視点に立って説明の順序を組み立てたり、分量を調整するべきであると実感しました。私自身が使い慣れているものを、いかにわかり易く伝えるのかを考える機会にもなりました。
- 初めてガイダンスを行ったときに比べ、学生の反応をうかがったり、レジュメへの記入の状況を見ながら行うことができたように思います。最後に必要な人には回答をお渡ししたのですが、持って行く学生が少なかったのは、適宜書き込みができたからではないかと思いました。また、聞き手にわかりやすい言葉を選ぶことも、このガイダンスを通して学ぶことができました。これは、実生活でも大変役立っています。
- レポートの書き方ガイダンスを担当させていただいたのは、今回が初めてでした。確かに内容は基本的なことかもしれませんが、レポートを書く上で必須である段取りを、私自身も改めて確認できたように思います。情報検索ガイダンスと違い、実習の時間を取らないため、90分間という時間をうまく使って、冗長な雰囲気にならないように心がけました。緊張しながらも、時間

をしっかり意識しながら話すことのトレーニングにもなりました。今後にも直接的に役立つ経験をさせていただきます。

- 3回目のガイダンスでしたので、落ち着いて進められました。過去2回のガイダンスの反省点を頭で整理しながら説明できたと思います。回数をこなしていくと、受講者に配布されているレジュメの項目をみて何を言えばいいのか、派生させて時間内にどんなことが言えるのかを考えられると思いました。自分の頭でしっかり話す内容を理解しているということが重要だと感じました。

「受講者(後輩)の反応」

- 受講者のみなさんは全体的に熱心に説明を聞いてくださり、実習でも積極的に検索を試していらっしゃいました。今回は現物投影機を使って、私が卒業論文で作成した文献目録、現在作成している文献目録、コピーした雑誌記事論文の整理に役立つ付箋等をみなさんにお見せしたところ、興味を持ってくださったようでした。
- いくつものデータベースを組み合わせて使うことで、探す文献の幅を広げたり、より便利な文献の所在地を見つけたりといった作業に興味を持った方が多くいらっしゃいました。データベースの有用性と共に、文献複写や現物貸借等の Web サービス、長年にわたる雑誌のバックナンバーの保存等、本学図書館の利便性にも驚いていらっしゃいました。
- 人数が多くなると受講生の反応をやや読みにくいと感じました。そのような中でも問いかければ、頷いてくれる学生や、答えてくれる学生もいたので、やはり基本は、受講者とのコミュニケーションがよりスムーズにガイダンスを進めるために必要だと思いました。また、実習では活発に質問が出たので、2、3人で1つの PC を使って検索をすると質問しやすいのかもしれないと感じました。どんどん、グループで検索していたので、しっかりガイダンス内容を理解してくれたのだと感じられました。

「全体的な感想・提案」

- 初めてのガイダンスということで不安もありましたが、事前に職員の方に不明点をご説明いただいたり、ガイダンスを何度も経験されているコンシェルジェの方にお話を伺うこともできたため、課題は残りましたが、無事にガイダンスを終えることができました。このような機会を、これから卒論に取り掛かる学部生の方にはぜひ活用していただきたいと改めて感じました。
- 1年生はパソコンに慣れている学生と慣れていない学生の差が大きいのので、実習の時気にかけるようにすると良いと思います。館内案内は20名以上だと後ろの方まで話がいきわたっていないように感じました。今後うまく工夫してスマートな案内ができるようにしていきたいと思います。
- ゼミによって先生のカラーや学生のカラーが様々なのでその都度うまく対応していく必要性を感じます。
- どうしても内容上こちらが一方向的に話すだけになってしまい、とくに今日は初めてのガイダンスだったので正直最後までたどり着くことで精一杯だったのですが、“プレゼンテーションする”ことの難しさ面白さを感じました。原稿だけにかじりつくのではなく、受講者の顔や目を見て、たまにジェスチャー等を交えるとよりわかりやすいかな...と思ったので、次回からもっと挑戦してみようと思います。受講者とコミュニケーションを取りながら、かつスムーズに進められるようになりたいです。

3. 基礎的日本語能力養成講習

見直し後の2009年度からの実施状況は以下の通りである。

初年次に基礎的日本語能力を養成することを企図した前期と、就職活動を控えた学生の支援を企図した後期ではそれぞれ異なる傾向が見える。受講者の満足度は高く、ほぼ目的を達していると思われる。

受講状況(申込者の学年)

[2009年度 基礎的日本語能力養成講習]

受講者の学年内訳

	参加者数	申込者					申込者中の 1年次の割合	申込者中の 3年次の割合
		1年次	2年次	3年次	4年次	計		
前期	59	54	6	4	2	66	81.8%	6.1%
後期	79	2	3	113	3	121	1.7%	93.4%
計	138	56	9	117	5	187	29.9%	62.6%

[2010年度 基礎的日本語能力養成講習]

受講者の学年内訳

	参加者数	申込者					申込者中の 1年次の割合	申込者中の 3年次の割合
		1年次	2年次	3年次	4年次	計		
前期	23	12	2	10	2	26	46.2%	38.5%
後期	45	2	2	63	0	67	3.0%	94.0%
計	68	14	4	73	2	93	15.1%	78.5%

受講者アンケートの結果

[2009年度 基礎的日本語能力養成講習 集計]

参加動機	前期		後期	
	人数	割合	人数	割合
1 大学での勉強にどのようなスキルが必要か知りたい	13	17.5%	2	2.3%
2 自分の日本語能力に不安がある	31	41.9%	33	37.9%
3 日本語能力をさらに伸ばしたい	25	33.8%	14	16.1%
4 その他(就職活動のため等)	5	6.8%	38	43.7%
合計	74	100.0%	87	100.0%

評価	前 期		後 期	
5 大変満足	37	68.5%	51	66.2%
4 まあ満足	16	29.6%	24	31.2%
3 普通	0	0.0%	2	2.6%
2 少し不満	0	0.0%	0	0.0%
1 とても不満	1	1.9%	0	0.0%
合計	54	100.0%	77	100.0%

図書館利用状況	前 期		後 期	
4 ほぼ毎日	24	40.7%	11	13.9%
3 週1~2回	23	39.0%	53	67.1%
2 月1回程度	8	13.5%	14	17.7%
1 ほとんど利用しない	4	6.8%	1	1.3%
合計	59	100.0%	79	100.0%

【2010年度 基礎的日本語能力養成講習 集計】

参加動機	前 期		後 期	
1 大学での勉強にどのようなスキルが必要か知りたい	3	11.1%	0	0.0%
2 自分の日本語能力に不安がある	15	55.6%	23	46.9%
3 日本語能力をさらに伸ばしたい	5	18.5%	9	18.4%
4 その他(就職活動のため等)	4	14.8%	17	34.7%
合計	27	100.0%	49	100.0%

評価	前 期		後 期	
5 大変満足	14	63.7%	29	64.4%
4 まあ満足	5	22.7%	16	35.6%
3 普通	3	13.6%	0	0.0%
2 少し不満	0	0.0%	0	0.0%
1 とても不満	0	0.0%	0	0.0%
合計	22	100.0%	45	100.0%

図書館利用状況	前 期		後 期	
4 ほぼ毎日	11	47.8%	15	33.3%
3 週1~2回	12	52.2%	24	53.4%
2 月1回程度	0	0.0%	5	11.1%
1 ほとんど利用しない	0	0.0%	1	2.2%
合計	23	100.0%	45	100.0%

公開実績報告会

1. 概要

2010年度は、2007年度（平成19年度）文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」の選定を受けた「マイライフ・マイライブラリー」の補助期間の最終年度となる。選定年度から展開してきた取組みの成果を広く学外へ公表・普及するために、2011年1月17日に公開実績報告会を開催した。

プログラム

【図書館内】14:00～15:00、18:00～18:30

学生アシスタントによる図書館ツアー

【23201 教室】15:00～18:00

学長挨拶（眞田雅子東京女子大学長）

実績報告（兼若逸之東京女子大学図書館長）

講演（逸村裕筑波大学附属図書館副館長）

各学生アシスタントの活動報告

当日の参加者は210名、この内、他大学図書館職員等の学外者は153名であった。報告会の前後に実施した学生アシスタントによる図書館ツアーには、約110名が参加した。

報告会は、眞田雅子東京女子大学学長の挨拶に始まり、兼若逸之東京女子大学図書館館長からの実績報告、逸村裕筑波大学附属図書館副館長（「マイライフ・マイライブラリー」外部評価委員長）の講演、学生アシスタントの活動報告が行われた。

2. 実施記録（要旨）

学長挨拶【眞田雅子東京女子大学長】

大学関係者の皆様にとっては、非常に忙しいこの時期に160名を超える学外からのお申し込みをいただきました。さらに、中には東北、四国、九州という遠方からお出でいただいているとのことで、心より感謝申し上げます。

東京女子大学は、文部科学省がGP事業を開始した2003年度に「女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開」で特色GPに選定されました。翌年度に「キャリア・イングリッシュ・アイランド」で現代GPに選定され、2007年度には2つ目の現代GPとして「東京女子大学キャリア・ツリー」が選定されています。そして同じ年に「マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム」が学生支援GPに選定されました。

東京女子大学のこれらのGP事業は一貫して、建学以来90年以上に及ぶ大学の歴史の中で培ってきたリベラル・アーツ教育の実績を現代に生かすために、新たな展開をはかることを目指しています。

とくに「マイライフ・マイライブラリー」は、図書館という大学の教育研究を担う重要な拠点において、学生支援の新たな展開をはかることをねらった点で、たいへんユニークであり、かつ大学の教育の活性化に果たす意義は非常に大きいと考えられます。2007年度に開始したプログラムは今年度で4年目を迎え、文部科学省の補助事業期間の最終年度となりました。来年度からは当初の計画通り、大学の経常的な事業として、さらなる充実をはかっていくことになっています。そのため今年度は自己点検・評価を実施し、その結果に基づき、外部評価をしていただきました。

GP事業の使命として「広く他大学の参考となる」、いわゆるGOOD PRACTICEとなることが求められていますので、本学の学生・教職員のみならず、広く学外の方々にも「マイライフ・マイライブラリー」のこれまでの実績をご報告し、外部評価委員長として御尽力くださった筑波大学の逸村裕先生に、外部評価結果を踏まえてご講演いただく機会として、この報告会を開催させていただきました。

本日の報告会が多少なりとも皆様のご参考になれば幸いに存じます。

実績報告【兼若逸之東京女子大学図書館長】

「マイライフ・マイライブラリー」は、2007年度に学生支援GPに選定され、今年度を持って文部科学省の補助事業の最後の年となり、外部評価を実施いたしました。そちらは後ほど逸村先生からご発表いただきます。

「マイライフ・マイライブラリー」の事業はハード・ソフト2面に分けられます。ハード面については、まず学生が図書館から離れているという現状があり、どのようにして学生を図書館に引き入れられるのかということから図書館の改修を考えました。ソフト面については、教員・職員側が図書館利用をいくらうったえても限界があり、学生自身が実際に図書館に行き、そこで学び、その力を他の学生に与えるという相互のあり方の中で、図書館をより長く・有効に使える道があるのではないかと、ということで、「学生協働サポート体制」を構築してみました。

改修後は、図面・写真の通り、コミュニケーション・オープンスペース、プレゼンテーションルーム、リフレッシュルーム、メディアスペース、グループ閲覧室、個人ブース等を備え、滞在型の学習を保證できるスペースを提供しています。

しかし、このようにスペースを作っても、それだけでは直ぐに学習に結びつくわけではなく、ソフト面でのサポートが必要となります。

ボランティア・スタッフは、(2、3階の)階段を上った直ぐのところにある優先席で目印を置いて、活動しています。本日お配りしている「図書館だより」もボランティア・スタッフによって作られています。例えば「地階特集」がありますが、地階があまり使われていない、本を探すのが難しいのではないかと、学生がそれぞれに課題を立てて、自分たちにどういうことができるのか考えて取り組んでいる一つの活動です。

サポーターは、図書館の利用案内、蔵書点検、オリエンテーション等を行っており、やはり見やすくサポーターとわかるようになっていきます(赤いエプロンを着用)。

システム・サポーターは、PCの操作説明、トラブル対処が主な業務となっています。どのように対応するのかについては、システム・サポーターの中で考え、受けた質問を整理してマニュアルとして作成しました。そのQ&A集を「PC質問箱」としてwebにも公開しています。

学習コンシェルジェは大学院学生で、資料の探し方、レポート・論文作成等の基本的な質問を受け、学習全般の質問に対応することになっています。いろいろな専攻の大学院学生がいて、学部学生は専攻の近いコンシェルジェを探して相談することができます。

システム・サポーターと学習コンシェルジェは入口近くのアシスタント・アイランドにいます。最初の頃は通る学生たちも少しぎこちなかったりしましたが、今では自然な存在となっており、非常にありがたいと思っています。

次に、プログラム開始～2010年12月までの実績報告についてお話しします。

2003年度～2006年度にかけて入館者数が減ってきていました。具体的な数字で言えば、2007年度の入館者は約16万5千人でしたが、2003年度は約19万人の入館者がありました。このような減少傾向をどうやって増加へと変えるのかが、メインとなってマイライフ・マイライブラリーのプログラムを考えることとなりました。2008年度、本プログラムの全面実施により20万人を突破しほぼ22万人、2009年度には約23万人、2010年度は12月時点で2009年度と同程度の入館者に達しています。

もう一つの悩みは館外貸出冊数が減少していることです。2003年度からのデータでは、2005年度に7万4千冊となったが、2006年度に急激に減少、2007年度も7万冊を割り、マイライフ・マイライブラリーを全面実施した2008年度に一旦7万冊を回復しましたが、2009年度に再び減少しています。

このような減少の原因については、学生の学習スタイルが変わってきているのではないかと考えました。すなわち、館外に本を持ち出して勉強するのではなく、館内において本を利用し、レポートも論文も図書館内で書いていることのあらわれではないかということです。もしもこのような利用だけになると、「授業外学習」を全て図書館で行うこととなりますが、これは現実的には難しいし、図書館としては館内利用だけではなく、館外貸出による学習にも活用してほしい、図書の貸出は増えて欲しいと考えていました。幸い、2010年度はほぼ7万冊を回復するかどうか、といったペースに動いています。学生の動きをみると、やはり図書館内での学習スタイルや学外での学習スタイルがかなり変わってきている感じがしますが、この辺の分析は今後考えていきたいと思っています。

次に、学生アンケートの結果をいくつかご紹介します。

- 2008年度のアンケートで、図書館改修後に図書館利用の回数が増えた、と回答した学生は約4分の1。
- 利用する場所ランキングの1位は一般閲覧席。(2008年度、2009年度アンケート)

一般閲覧席があまり利用されなくなるのではないかとという心配もあり、改修後に時々見回っている際の印象としても、メディアスペース等の混み具合から比べ、それほど学生がいないように見えたが、実際には利用する場所の1位は一般閲覧席であることがわかりました。

考えて見ると、例えばメディアスペースは50席程度が対象であるのに比べ、閲覧席は広いため、人数的に見ると一番多いのですが、外から見ると他のスペースの方が多くいるように見えるのであろうと思います。この点に関しては、閲覧席の利用状況の調査をすればそれなりの人数は出るのだろうが、残念ながら現在はまだこの種の統計はとっていません。今後改善していきたいと思っています。但し、はっきりしているのは、学生は一般閲覧室で勉強するのが基本であるということだと思っています。
- 滞在型利用(2010年度アンケート)

「図書館に滞在して利用しているか?」と滞在型利用を意識しているかどうかをきいたところ、「非常にそう思う」28.7%、「そう思う」36.4%、「ややそう思う」24.5%、となり、89.6%の学生が肯定的な回答をしています。
- スペースの利用目的

メディアスペース・貸出用ノートPC

ほぼ同じような利用目的となっていて、レポート・論文作成が一番多くなっています。両者は同じような役割を担っており、課題対応型の利用と言えます。

コミュニケーション・オープンスペース

課題・試験勉強が1番多く、その次がグループ学習・活動となっています。

リフレッシュルーム

飲食できるスペースなので飲食が1番多くなっていますが、その次に課題・試験勉強24.0%、グループ学習・活動16.1%と続き、これらも低い割合ではなく、基本的には、課題・学習がベースにあって、図書館を利用している実態を示しているものと理解しています。
- 図書館を利用する際にどこがどのくらい重要?

「非常に重要+重要+やや重要」の割合を高い順に見てみると、

 - 1) 一般閲覧席での読書・学習 94.0%
 - 2) 図書館所蔵の本・雑誌の館内利用 93.6%
 - 3) 図書館所蔵の本の館外貸出 82.8%
 - 4) 1階での読書・学習 81.7%

- 5) 大学生活(とくに学習面)の支援 79.3%
- 6) 就職活動の情報収集 74.1%
- 7) リフレッシュルームでの飲食・会話 73.4%
- 8) グループ学習・活動 72.2%

となっており、それぞれが相互補完しつつ、図書館の役割を認識して利用している結果だと理解しています。

専任教員アンケートの結果

- 図書館資料の利用を学生に勧めていますか？
「非常にそう思う」44.3%、「そう思う」36.1%、「ややそう思う」9.8%、計90.2%
「ややそう思う」が10%近いのですが、それを除いても約80%の教員が、学生に図書館利用を勧めていることがわかります。
- 学生の学習や大学生活を支援する場として、図書館はその役割を十分果たしているか？
「非常にそう思う」23.8%、「そう思う」49.2%、「ややそう思う」23.8%、計96.8%
「十分に」という質問の仕方をしていの中で、「非常にそう思う」が23.8%、「そう思う」も50%近い数値となっているのは、教員の中にもそれなりの認識がなされているものと思われます。
- 「マイライフ・マイライブラリー」の取組みが図書館の機能充実につながっていると思いますか？
「非常にそう思う」20.3%、「そう思う」50.8%、「ややそう思う」22.0%、計93.1%
図書館の機能において、仮に「マイライフ・マイライブラリー」を無しにすると考えた場合、図書館がマヒするのではないかと思えるような数値となりました。

学生アシスタントのアンケートの結果

「アシスタントをやって良かったと思うか。」という質問にほぼ100%が肯定的回答となっています。学生アシスタント(システム・サポーター、学習コンシェルジェ)はメーリングリスト(等)を使ってコミュニケーションをしており、これまでの経験がどんどん積み重なるようになっていきます。学生アシスタントの一員として自分がやっているという意識が高く、学生アシスタントをやりぬいたことに対する成就の気持ちも高いものがあります。

やってみたい他のアシスタントは、スライドの通りです。全員採用はできていません。システム・サポーターの例で言えば、スキルのチェックをして採用を決定するようなことをしています。ボランティア・スタッフは人数制限なしですが、東京女子大学の4千数百人の学生において現在では200人近い学生が希望しているので、4年間ではのべ700人くらいになります。本学の規模の大学の中で200人近い学生がアシスタントを希望し、応募してくるような状況が、本プログラムの活動における力になっていると私は感じています。

学生がどのような理由で応募するのかというと、「わたしも助けてもらったから」「今はわかるようになったので今度は自分が助けたい」という例が多く見られます。実際に2010年度の学習コンシェルジェ応募者(=採用者)には学部生の頃に学生アシスタントの経験があった学生がいます。もちろんスライドの図に見られるように、ボランティア・スタッフ サポーター システム・サポーターというような、ステップアップの形、ロールモデルの提供も見られますが、システム・サポーターをしていた学生が、(次は)サポーター、あるいはボランティア・スタッフをやってみたいという例もいくつかあります。「自分がお世話になったから、今度は自分が返したい」という理由で自分から応募してくる学生も多くいます。

また、友達が学生アシスタントをやっていると、「それが楽しそう、面白そうだから」として応募する例も非常に多く見られます。友達の姿を見て自分もそのようになりたいと思ったからということだと思います。

このような学生アシスタントの動きが全学的な動きになるためのイベントを色々考えさせています。すでに行っていることとしては、

- ボランティア・スタッフの利用促進デーを実施して、ボランティア・スタッフの仕事を学内に広く知らしめる。
 - ボランティア・スタッフが「図書館だより」を作成する。
 - システム・サポーターが、多岐にわたった項目についてのFAQを構築、「PC質問箱」としてWebに掲載する。
- 等があります。

学生アシスタントの全体ミーティングを、前期・後期に1度ずつ行っています。そこでは解決すべき問題について討議したり、発表、親睦をはかっています。特徴としては、学年間の上下関係はなく、属している学生アシスタントの立場で話し合います。私も楽しみにしており、毎回学生からの発表に一方では非常に感激し、教える者として学ぶべきところが非常に多いと感じています。

学生協働サポート体制のまとめ

学生アシスタントの積極的な活動は学生アシスタントの中で起こっています。自身だけでなく、人の経験が自分の経験にもなる、すなわち「一人の経験がトータルの経験になるシステム」となっており、経験を通じた自身の大学生活の充実が実現できる良いシステムであると思っています。メーリングリストを見ると、「よりわかりやすい・正確・的確な質問者への回答を常に心がけている」ことが良くわかります。どのような対応が図書館利用につながるかを常に考えてくれていることがわかり、このような経験を通じて社会的成長につながっていると思います。

マイライフ・マイライブラリーは、学習滞在型図書館として、学習活動の拠点、学生協働の拠点、学生生活の拠点を目指してきましたが、実際の事業を通じて、学生の社会的成長を促すプログラムとなっていると自負しています。

講演【逸村裕筑波大学附属図書館副館長】

本日はマイライフ・マイライブラリーの外部評価委員長としての講演ということで、「マイライフ・マイライブラリー 高等教育変容への期待」という演題でお話しいたします。途中で筑波大学の学生2名が話します。(平山氏と有元氏の紹介)

「マイライフ・マイライブラリー」は、大学・図書館関係者にとっては一般的には「ラーニングコモンズ」と呼ばれる機能となります。他にも「ライブラリーコモンズ」「インフォメーションコモンズ」等いろいろな呼び方がされ、日本だけの話ではなく、海外でもこの十数年いろいろなところで試みられています。

私は、大学図書館員を11年、その後3つの大学で教員をやり、3つの大学図書館の管理職を13年4ヶ月、文部科学省の学術調査官を6年ほどやっております(併任)。さらに社会人大学院生も7年やっています。

大学を移るたびに1年生の担当をしてきました。上智大学で図書館員として1年生向けの図書館ガイダンスを行い、愛知淑徳大学で1年生を最初から教え、名古屋大学で1年生に情報基礎を教え、現職の筑波大学では、2年目から改組された知識情報・図書館学類の1年生の学年主任をしています。

高等教育の変容について

ご承知の通り、日本では少子化とユニバーサル化が進んでいます。

1966年には249万人だった18歳人口が減り、一旦回復したものが、急速に減り続けています。(短大・4年制大学をあわせた進学率の状況はスライドの通り)。

マーチン・トロウは、(高等教育について該当年齢人口の在学率が)15%までがエリート、50%までがマス、50%以上がユニバーサル化と言っています。私はその文献を1970年代に読み、(日本では)50%まではいかないだろうと思っていましたが、スライドの通り、2009年には4年制大学への進学率が50%を超えています。2009年109万人の子供が生まれていますので、2027年には一体どうなるかという話になります。

一方、様々な面で社会の変化が高等教育に影響を与えています。従来モデルの崩壊がマスコミで叫ばれており、いろいろな問題が起きています。これも、日本だけの話ではありません。アメリカ合衆国も遙か前からユニバーサル化となっていて、この数年就職難も非常に厳しく、日本の比ではありません。イギリスにいたっては40%の大学卒業生が就職できていない。さらに、15年前に0だったイギリスの国立大学の授業料が来年には100万円になるといわれており、労働学生の多いイギリスでは、暴動につながるという話にまでなっています。そこまで苦勞して入った大学なのに、そのまた先が厳しいという状況です。

ただし、暗い面だけではなく、いろいろないい事もたくさんあります。本来学問には国境はありません。日本における外国人留学生は1983年には約1万人でした。同年、中曽根内閣のもとに「21世紀の留学生政策懇談会」が持たれ、21世紀初頭に外国人を10万人受け入れることが宣言されました。無理ではないかと思っていたところ、1993年5万人、2003年に11万人になり、先日の文部科学省の発表で、現在(2010年)は14万人で前年比8,600人ということで、かなり国際化は進んでいます。

グローバルCOEで、いくつかの大学が留学生を多く受け入れるということで財政支援を受けることが発表されました。国立大学の筆頭は筑波大学で、今でも多くの留学生がいますが、10年後には学生の3割を留学生にすると宣言しています。今後はそれが普通になると思われます。

2010年12月に中央教育審議会から『学士課程教育の構築に向けて』という答申が出されています。

まず、学士力として課題解決能力の重視、単位制度の実質化として事前、事後学習の重視があります。本来は1単位につき2時間の事前・事後学習が必要となっています。従って4年間で8,000時間ほど学習しないといけないということになります。半期15回の授業時間の確保に加え、その倍の時間の事前・事後学習も義務付けられると、当然のことながら図書館の出番となります。これはすでに1951年の大学設置基準で規定されていたことであるので、60年前に決められていたことがやっと実効性を持つのかという見方もできますが、その点については、就職活動の長期化等の問題もあって別の話になっていきます。

教育方法の改善としては、FD (Faculty Development) があります。このFDも本来の意味は、教員そのものがどうあるべきかをきちんと学ぶということですが、今の日本では教育方法の改善に限定して用いられています。それだけ根が深いということかもしれません。この答申では、初年次における教育の配慮について書かれています。つまり大学にとって学習活動の活性化が課題であるということです。

一方、情報技術の進展の影響として、知識量の増加があります。若者の活字離れといわれていますが、学生達の携帯を含めたネット上の活動を見れば相当量の活字を読んでいることがわかります。インターネットであり、wwwであり、それを探し出すためのサーチエンジンを使うことであるとともに、中等教育の教科『情報』の影響や大学における情報教育の成果でもあります。もちろん大きな問題として質の問題があります。簡単に手に入る沢山ある情報から何が重要なのかを選ぶ、そしてそれらをつなぎ合わせて自分なりの知識を再構成するためにはどうしたらよいのかということで、新たなリテラシーが必要です。そのためには能動的な学習が必要で、これが大学教育の活性化とつながっていくと言われています。

そこにおりしも登場したのがラーニングコモンズです。ラーニングコモンズの定義は曖昧模糊としています。共通項としては、学生が主体的な学習を行なう場ということになります。先程の報告にあった東京女子大学の例もそれを目指しているということで、マイライフ・マイライブラリーもラーニングコモンズという文脈の中で話をします。

ラーニングコモンズには色々な要素があります。ネットワーク接続環境、コンピュータ機器の提供、学生利用が中心で、グループ学習やおしゃべりも可能で、図書館の一部であること等。但し、外部的に見れば、別に図書館の一部である必然性はないとも言えます。

滞在型図書館が重視されます。居心地がよくないと学生が来ないということがあります。1980年代以降、大学図書館の環境は急速に改善してきています。かつてアメリカで1960年代に発展したUndergraduate Libraryでは、コンピュータ・ネットワーク以外は前述の要素が網羅されており、それらの機能を図書館が持つべきであるということがその頃の文献に既に書かれています。

筑波大学の学生の調査結果によれば、日本のラーニングコモンズは約100大学あるが、ラーニングコモンズの要素技術はどれも3割以下しか持っていない、東京女子大学の例にある学生スタッフを備えている大学は2割以下となっています。日本ではまず「ラーニングコモンズ」という名乗りが先となっていて、単なる空間提供が多いというのが2010年の現状です。利用者のニーズに合致しているものではありませんが、そこには図書館員が出てこない、大学全体の中での位置づけがわからない、図書館機能との関係もわからないといった具合です。

学生サイドからの話に移ります。

入試の多様化が進み、読売新聞の記事によれば私立大学では一般入試以外の入学者が過半数(56%)となっています。一方で大学入試センター試験受験者は558,000人ということで18歳人口の4割近

くが受けています。予備校・進学校の大学入試センター試験や一流大学受験への対応ぶりは凄まじいものがあります。

現代の学生は物心ついたときからネット・動画等があるデジタルネイティブです。一方、ここにいる人の多くはデジタルイミгранト（移民）すなわち成長してからデジタル化に習熟した人間です。デジタルネイティブにとってはイベント等を実施したら動画配信するのが当たり前で Twitter も普通の存在です。デジタルネイティブの特性として、PC リテラシーは別に高くない、書くのは PC よりケータイの方が早い、インターネットは PC ではなくケータイで、テレビは話題にする、動画とは見るものではなく参加するものということがいえますが、それらの実態をさらに把握する必要があると考えています。そこで、筑波大学知識情報・図書館学類の1年生に毎年とっているアンケートの結果から、一部を紹介します。

- 教科「情報」の影響は明らかにあります。ただし Word と PPT のみで、Excel、HTML は大した影響はありません。PPT は画像を貼りこんだりハイパーリンクを使うことができ、高校生でも面白いと感じるようです。情報倫理、著作権やネット犯罪については、あまり影響はありません。これは受験科目ではないことが最大の要因ではないかと思われます。
- Google 認知は昨年度はじめて 100%になりました。携帯電話は全員が持っている、ブログはほぼ全員が知っていて ID を持っているのは 20%、mixi は 9 割が知っていて ID を持っているのは 30%、Twitter は 7 割が知っていて ID を持っているのは 15%、Facebook は 15%が知っていて ID を持っているのは 1%という具合です。但しこれらは 1 年生の 4 月の時点のことであり、2~3 年生になると授業中でも Twitter で呟いていて、わからないことがあると質問し、分かる学生がそれに答えるということをしています。さらに最近では、教員自身がその Twitter での呟きをまとめて公開したりもしています。
- Wikipedia は全員が知っています。知らないものを調べる、とくに小説・ドラマのストーリー等を調べています。

以上から、「サーチエンジンにヒットしないものは存在しない」ということになります。このことは図書館に大きな影響が出てきます。「何故 OPAC はサーチエンジンのように使えないのか？」という不満につながってくるからです。そこで次世代 OPAC のようなものを入れると、今度は OPAC は図書館の単純なマッチングだけでいい、という話にもなります。

学生の意見を聴く、つまり学生は何を考えているのかというと

- 図書館を利用しない理由としては、教科書・配布資料・WWW 資料で十分、貸出とコピーで済む、行く暇がない（バイト、サークルで忙しい）そもそも勉強をしない。大学院学生になると、電子ジャーナルとネット情報源で十分、自宅（研究室）の方が作業環境良い等があげられる。このように、貸出とコピーだけでは図書館利用とは考えていない、つまりちょっと行くのは「利用」だと考えていない、図書館に滞在して何かするのが利用だと考えている。
- 図書館を利用する理由としては、電子化されていない資料の利用、館外持ち出し不可の資料を使う作業、レポート作成、新聞・一般雑誌を読む、居心地がいい、ソファ使用、涼しい/暖かい、待ち合わせ場所等が挙げられます。
- 利用については 2 つの理由があると思われます。 必要に迫られて利用する、 いきたい図書館だから、の 2 つです。

必要に迫られて利用する

必要な資料がそこにしかない、他に作業をする環境がない等で、このような利用が多いということが、イコール良い図書館とはなりません。

行きたい図書館だから利用する

居心地がいい、「なんとなく」行く気になる、つまり選択肢の中から選ばれる図書館。このような利用であれば、利用が多いのが良い図書館と言えます。

東京女子大学図書館は の理由による利用が今の段階では多いと言えます。学生は多様であり、1人1人が違いますし、1人の中でも矛盾があります。

筑波大学知識情報・図書館学類の本来のミッションは図書館員育成です。まずは筑波大学の事例を話し、東京女子大学と比較してみたいと思います。

- 1年生の1学期(3学期制)に情報基礎実習の授業でメールの書き方から教える
- 1年生の2学期にプログラミング演習
- 2年生：知識情報演習＝資料組織演習＋レファレンス演習
OPACを作る／パスファインダーを作る／サーチエンジンを作る
- 3年生：主専攻分け、その後・・・卒業研究
- 4年生：知識情報特論では、教員・外部講師による最先端研究の話を聞かせます。割りと4年生はついてくるし、Twitterを使って学生間で説明が飛び交ったりします。

このようなカリキュラムにあわせて、ラーニングコモンズが要るのではないかということになりました。筑波大学の中央図書館ではなく、元図書館情報大学だった春日エリアにラーニングコモンズを置き、院生等をチューターとして雇ってサポートさせることを始めました。

- 2008-2009年は空き教室、2010年4月にやっと図書館内に設置しました。
- 運営は学生に任せる、学生主体でできる、と判断して、事後承諾を取ればよいという形で任せることにしました。

ここから先は実際に春日ラーニングコモンズをやっている学生に話してもらいます。

「春日ラーニングコモンズの1年」(筑波大学情報学群知識情報・図書館学類4年 平山陽菜氏)

東京女子大学等との違いは、学生スタッフが運営している点です。

計画立案、プログラムを立てるところから有志の学生スタッフが主体となって進めており、何かを指示されたり決められたことをしているわけではありません。学生スタッフは、自分たちが学生生活を送る上でどんな仕組みがあれば楽しく過ごしやすいかを考えて活動してきました。本日は平山がこの1年の活動について紹介し、有元が学生が実際にどのように考え、学生が運営することでどのような課題があるのか等について話します。

ラーニングコモンズには3つの要素が必要と考えています。場所、設備、利用者を含めた「人」です。この3つの基盤の上にラーニングコモンズがあると考えています。

学生スタッフの仕事は大きく2つあります。チューター業務：学生がチューターとして在席し学生からの質問に答えています。イベントの企画・実施：学生スタッフが主体となり学生の勉強会やイベントを開催します。

この1年間のイベントは、

- 4月/5月に有志によるお茶の水女子大学・東京女子大学の見学ツアーを行いました。それぞれの大学の学生スタッフとの交流もした中で、それぞれの大学と筑波大学との違いを強く感じました。女子大学と共学という違いだけではなく、大学のカリキュラムや学生の気質、ラーニ

グコモンズの仕組み等です。それぞれ素晴らしくて参考になる点が多々ありましたが、ただ真似をするだけではなくて自分たちの大学に合ったラーニングコモンズを作るべきと感じました。

- 6月に、東京大学・知の構造化センター「pingpong プロジェクト」のワークショップを春日ラーニングコモンズで開催しました。これについては、2010年12月に発行された『思想地図』という雑誌に紹介されています。
- 6月と9月に図書館情報学若手の会（ALIS）の定例会を開催しました。
- 勉強会等も実施しています。Tsukuba.rb、スライド勉強会、学生からの要望を受けた研究室説明会等です。
- 11月に、図書館総合展で学生スタッフによるポスター発表を行いました。
- ソーシャルリーディング研究会も開催しています。電子書籍を利用した新しい読書会の形です。今回紹介した以外にもいろいろやっています。

春日ラーニングコモンズでは、インターネットを使った情報発信を積極的に行っています。例えば、学生スタッフやチューターが執筆するブログがあり、業務日誌の公開やイベントの中継等があります。

このような活動の結果、平成21年度に比べ平成22年度は利用者数が大幅に伸びています。また今後はチューターのレファレンス記録の授業へのフィードバックやチューターの質の向上をはかること等を計画しています。

「筑波大学春日ラーニングコモンズ：ラーニングコモンズスタッフの視点から」(筑波大学情報学群知識情報・図書館学類4年有元よしの氏)

私自身は2010年1月から学生スタッフとして参加しています。春日ラーニングコモンズは学生主体のラーニングコモンズとして20名程度の学生スタッフが活動しています。

私自身が主催したイベントとしては、図書館情報学若手の会（ALIS）の定例会や研究室相談会等があります。

2011年2月5日にはALISとLifoのコラボ企画を実施する予定です。

私達はさまざまなイベントの企画運営を通して、ラーニングコモンズがどのようなものであるのか、そしてどのように使えばよいのかを学生スタッフに知ってもらえるようにしたいと思っています。

2011年3月5日「うごくラーニングコモンズをつくる」というワークショップを開催します。

学生スタッフの募集からチューター業務、イベントの主催に至るまで、すべてを学生主体で行っています。ここで他大学との比較してみます。お茶の水女子大学や東京女子大学に比べ、筑波大学のラーニングコモンズはよく言えばコンパクトでとてもシンプルなものとなっています。しかし、筑波大学のラーニングコモンズは非常に可能性を持っていると考えています。それは、ラーニングコモンズの3つの要素の中で、「人」が一番重要であると考えているからです。「人」というのは学生スタッフ、図書館員、教員、図書館利用者、学生といった図書館を利用する全ての人を指します。何故「人」が重要か、場所・設備は大学によって差がつくが、大学のオリジナリティを出すときに重要になるのは「人」だからです。

しかし現在の春日ラーニングコモンズはまだ学生が集う場所になりきれいていません。

その理由としては、現在ラーニングコモンズに関わっているのは、学生スタッフと一部教員だけであり、多くの教員・図書館員がラーニングコモンズに直接的に関わっていないという現状に問題があるためだと思います。また、各種イベントの開催等を行っていますが、学内にラーニングコモンズが浸透するにはまだ時間がかかるのではないかと考えています。

そこで今後の展開としては、学生・教員・図書館員とコミュニケーションをとることで、ラーニングコモンズのあり方、運営やニーズについて考えながら春日エリアにあったラーニングコモンズを運営したいと考えています。

このようなことは筑波大学だけの話ではなく、どこのラーニングコモンズでも同様に言えることではないかと思っています。ラーニングコモンズ自体は海外のモデルを持ってきたものですが、日本にあわせる上で、その学生の特色にあった形で作るべきではないでしょうか。さらに学生は毎年入れ替わるので、少しずつ大学・学生にあわせて変えるべきだと考えています。図書館情報学の実践のためのラーニングコモンズにご期待ください。

(再び逸村裕教授)

まとめに入ります。日本におけるラーニングコモンズの歴史としては、2000年の国際基督教大学のオスマー図書館が嚆矢であることは間違いありません。そしていろいろな形のラーニングコモンズがあります。東京女子大学以外にも、お茶の水女子大学、名古屋大学、金沢大学等、さまざまにあるし、あっていいと思います。それは学生が多様であるように大学も多様であるからです。

そして、外部評価委員長としては東京女子大学の「マイライフ・マイライブラリー」は成功していると言えます。

外部評価結果については、すでにwebにあがっていますが、簡単にポイントだけお話しします。

- 一番の成功要因は、大学のミッションとの連動がなされている点です。しかも先程の兼若館長の話にありましたように、活動内容は変わりながらも、目的は明解、ゴールも明解で、かつ東京女子大学としての立ち位置に即した内容を備え、それが変わり続けている点が非常に好ましい姿勢で、これが「ラーニング」のあり方であると言えます。
- 成功の要因2は、1階において、外から学生が学んでいる光景を見ることができるところです。キャンパス内のロケーションも良く、また図書館内から見える景色にも配慮が払われており、非常に良い大学としての雰囲気醸し出しているというのが何回か来た感想です。
- 成功の要因3は、様々な形で学生アシスタントが非常に効果的に機能している点です。ラーニングコモンズは「学生主体」であると言われますが、その中身は大学により異なります。東京女子大学の場合はアクティブに動いており、モチベーションの高め方が非常に良い。今後は大学の経常経費で行うことで課題もあると思われませんが、いっそうの発展を期待したいと考えます。
- 他の外部評価委員のコメントでもありますが、成功の要因4は、大学の学風・学生気質に図書館が積極的に対応して、学生の勉学をサポートしている点です。他の外部評価委員は、1人は東京女子大学の卒業生、もう1人は、東京女子大学に多くの学生を送り込んでいる高等学校の教頭先生で、そのようなお立場から非常に意味づけをよく考えたこのような発言をされていました。

- 成功の要因5としては、学生は他の学生に教えることで伸びる。それを巧みに取り込んだ優れたシステムであることです。これは、教育工学でいうところのobjective self awarenessですが、教育としてあるべき姿だと言えます。
- 大学は「教育」の場でもあるが、「自ら学ぶ支援の場」ともとらえれば、図書館機能に求めることが何か焦点も定まってきます。これも大学によって事情は異なります。偏差値も違うし入試科目によっても違う、そこでその大学の図書館が何をなすべきかが見えてくるはずですが、そしてこれはある意味「評価の原点」でもあります。評価はあくまでもこのあといっそう良くなるために今何をすべきかが基本的な視点だと考えています。私自身、評価の際にはあら探しに行くではありません。もちろん、問題点は指摘します。今回の東京女子大学の場合であれば学生アシスタントの経費・労力負担等を指摘しましたが、それを乗り越えていただけることの期待を持っています。その意味では、質問紙の作り方等、適切なR&D(Research& Development)が重要であると思います。

まとめです。

今学生が望んでいるもの、そこだけに応えているのでは、すぐ陳腐化してしまいます。とくに情報技術の進歩には凄まじいものがあります。それこそが高校と大学の学習の違いで、受身であってはもうどうにもならない、これからの時代は能動的に進んでいかなければならない。幸いにして、日本には高い技術があります。それは日本の特性でもあり、国際化の時代にうまく提供していきたいと考えます。大学教員は教育だけではなく研究もしなければならぬが、研究がついて回る大学というものを、それとなく学生に意識させることも重要です。研究者も研究室にこもっているばかりではいけないのであらうと思います。

あらためて申し上げますが、現時点でマイライフ・マイライブラリーは成功していると言えます。但し今日の成功は将来の成功を保証しないのが現代のあり方です。これからが課題です。

学生アシスタントの活動報告

学生アシスタント毎に全体説明を代表者が行い、その後、参加者が一人ずつ活動の感想を発表した。
(以下の数字はアシスタント毎の発表順)

【ボランティア・スタッフ】

1) 代表(文理学部数理学科3年)

ボランティア・スタッフは、利用者が一番近い存在として、図書館利用の手伝いをしています。3年前の「マイライフ・マイライブラリー」発足当初、当時のスタッフも利用者のお手伝い、例えば資料探しや、図書館の利用方法の案内等をする事によって、図書館利用を促進する目的を達成しようと頑張っていました。しかし、まだまだボランティア・スタッフの存在が利用者に知られていないのが現状でした。そこで今年度は4つの新しい取り組みをしました。

これまで紙で提出してきた活動報告をメーリングリストでメンバー全員が共有できるようにした。どの時間帯に利用者が多いか、ここがもっと便利になったらよい等の意見交換の場となり、改善点も見えるようになった。

OPAC 端末の上に「ボランティア・スタッフ活動中」という掲示を出すことにした。活動中に、OPAC 検索の後、誰に聞けばいいのかわからないという利用者の様子に気づいたので、OPAC 検索の後に資料探して分からないことがあれば、ボランティア・スタッフに聞くというラインを明示した。

ボランティア・スタッフ一人ひとりが利用者向けのメッセージをホワイトボードに書くようにした。2階(閲覧席・書架)に上がった際に目立つ場所に告知を出すことにした。最近活字の綺麗な掲示が多くてかえって目立たない。手書きの方が目につくのでは、と思い設置した。案の定、すれ違う人が一度見て、もう1度戻って見たりしている。

これまでのボランティア・スタッフのミーティングでもたびたび意見が出ていて、申し送り事項であった「利用促進デー」を卒論執筆期間に実施した。これによって認知度が上がるとともに、ボランティアの士気も向上したと思っている。私自身にとっても、企画が通る嬉しさと実際に行うことの難しさを知り、みんなで一緒にやることの喜びを知ることができた。

さらに、ボランティア・スタッフをしていると机に向かう時間が増えるので成績が上がりました。

2) 現代文化学部言語文化学科3年

3年次から始めました。きっかけは図書館だよりの学生アシスタントの記事を見て興味を持ち、また学生アシスタントとして活動していた友人の話聞いて始めることにしました。ボランティア・スタッフは固定時間ではなく、やりたい時、空き時間に活動すればよいので、無理なくできる点がボランティア・スタッフの魅力の1つだと思います。

3) 国際社会学科社会学専攻2年

1年生の時からやっています。同時に図書館だよりの作成を去年からやり、今年は作成のリーダーを任せ、大変だったけれど、正に汗と涙の結晶として作成できたことがとても嬉しかったです。きっかけは本が好きなこと、覚えた知識を少しでも伝えられたら、と思ったこと。目下の悩みは質問が少ないこと。認知度が低いのか、もしかしたら皆さんもう図書館の利用の仕方を知っているのかもしれませんが、それでも質問が少ないのはさびしく思います。

利用促進期間後の活動で活動から1年半で初めて質問を受けましたが、PCのログインについてでした。ボランティア・スタッフは図書やOPACだけでなく、コピー機やPCのログインの方法も知っていると、利用者にも教える側にも有意義なのではないかと思いました。

【サポーター】

1) 代表(文理学部英米文学科4年)

サポーターは、決められた時間帯に赤いエプロンを着用して、主に返本と書架整備を担当します。カウンターに行くとブックトラックが各階ごとに分けられていて、指示された階の本を請求記号順に並べ、カウンタースタッフに確認してもらいます。問題がなければ各階で返本作業をします。返本作業中に困っている人を見かけたら声をかけます。その時、「大丈夫ですか?」と聞くと、困っている人は大丈夫じゃなくても「大丈夫です。」と逃げてしまうので、この頃は皆で「何かお探しの本はありますか?」等と目を見て聞くようにしています。そう聞くとちゃんと答えてくれるのです。一緒に本を探す手伝いをしてよくわからなければ、1階にいる職員に聞く等臨機応変に対応しています。

やっていた良かったことは、専門書・一般書を問わず色々な本に出会うことができることです。そして、4年生なので最近まで自分の卒業論文にあくせくしていましたが、返本の最中に見たことのないシェイクスピアのビジュアル本を見つけたので、ちょうどオフェーリアに関する卒業論文を書こうとしていた友達に伝え、その友達がその本を実際に使い、役に立ったと感謝されたときはとても嬉しく、あらためてサポーターとしてのやりがいを実感しました。

2) 文理学部英米文学科3年

2年生の時に1年を通してやっていました。良かったことはジャンルをまたいでたくさんの本を知ることができることです。普段は自分のレポートに必要な本しか手に取りませんが、活動中には普段の何百倍もの本を見ることができ、仕事中に自分の知識欲が刺激され、今一番学習意欲が高まっています。たくさん本をのせたブックトラックを運ぶ際の音やたまに質問を受けて利用者と会話する際等、図書館の1階だけではなく、2~3階でも学習の場として生き生きとした感じが生まれているのが楽しいです。

3) 文理学部心理学科4年

3年生の時に1年間活動しました。サポーターをやっていた良かったことが2つあります。

図書館利用が便利になった。具体的には、各スペースの使い方がわかったことと、情報検索の仕方がわかり、それを生活に取り入れられたこと。

図書館自体に強く興味を持ち、図書館学を勉強してみたいと思うようになり、昨年、司書講習を受けて司書資格を取りました。本学図書館についてのみならず図書館全体について学べたのは良かった。このようにサポーター活動は大学生活にとっても、私自身にとっても、強い影響を与えてくれました。

4) 文理学部英米文学科4年

自分の専門分野以外の本にも触れられることがよかった。これまでは3階の専門分野に関する書架に行くだけでしたが、配架の前に並び直しをしながら、「こんな本もある」「これも面白そう」という興味を持ったり、配架作業時に普段は行かない書架も見ることができ、様々な分野の存在を知り、興味が広がったことがよかったと思います。また、配架の仕組みがわかったことで自分の資料を探すのがスムーズで、速度も速くなりました。

5) 人間科学科言語科学専攻1年

前期から活動しています。サポーターの活動をしていて、自分の中で変化したことは、本の興味の幅が大幅に広がったことです。返本作業中にこれまでは見たこともなかった難しそうな本や様々なジャンルの本を見て、それらを自分の知識にした人がこの大学にいるということにとっても興味を持ちました。自分の学習に役立つような本も活動を通じて見つけられたし、レポート執筆時にも関連する本を見つけれたりして、自分の学習にも役立っています。

6) 文理学部社会学科3年

授業の空き時間は寮に帰っていて、以前は図書館を利用したことがなかったので、サポーターに応募しました。初めは地階への行き方やOPACもわからないくらい、全く図書館の使い方がわからなかったのですが、配架作業やミーティングを通じて、今まで気づかなかったいろいろな視点を知り、また他の利用者が図書館を利用する姿を見て刺激を受けています。今までは質問されてそれに答えていただけでしたが、この前のミーティングで、「何かお探しですか?」と聞くとよいという話を聞いたので、次からは勇気を出して声をかけてみようと思います。

7) 文理学部心理学科3年

今年度前期から活動しています。サポーター活動の良いところはみんなと同じく、たくさんの本に出会えたことです。もしサポーターをしていなかったら絶対に出会わないような分野の本にも出会うことができるとも役に立っています。配架作業中に心がけていることは、速さより正確さです。私たちが間違えると利用者である学生が本を探すときに大変な思いをします。このような意味で、本の配架は単純作業のようでも責任があるものですが、図書館の運営に携わっている、役に立っていることが実感できる仕事だと思っています。現在就職活動中ですが、この責任のあるサポーターの仕事は、社会に出てからも何らかの形で活かせるのではないかと考えています。図書館で働くという機会はなかなかないと思うので、これからもがんばっていきたいと思います。

8) 国際社会学科国際関係専攻1年

大学で一番好きな場所は図書館です。そこで仕事ができると聞いて応募しました。サポーターの仕事は簡単そうに思われがちですが、正しい場所に返さないと利用者がとても困ります。とくにそれを実感したのは卒論の時期で、たくさんの本を並べて卒論を書いている4年生の姿を見て、サポーターはとても大きな責任を負っていることを実感しました。利用者がスムーズに本を借りて学習に励めるように、同じ学生なので利用者としての視点をもって運営に携わっていきたい。また、こういう学生が直接図書館の運営に関わるような体制がもっと他の大学でも広まれば良いと思います。

9) 国際社会学科国際関係専攻1年

サポーターに応募したきっかけは選書ツアー。選書ツアーで興味を持っている本を見つけられて自分の興味のある分野がわかり、自分を知る良いきっかけとなりました。サポーターをしてみると、自分の分野以外の本を目にするので他にも興味がわき、自分で本を探すのも上手になり、図書館を利用しやすくなりました。

【システム・サポーター】

1) 代表 (現代文化学部コミュニケーション学科3年)

主に図書館1階アシスタント・アイランドで活動しています。主な業務内容は、PC操作等に関する質問への回答と、プリンターへの用紙補充・トラブル対応等です。サポート対象のPCは、メディアスペースPCと館内貸出用ノートPCです。利用者からの質問を受けることはもちろんのこと、10~15分おきに巡回を行い、困っていそうな利用者にはこちらから声をかけることも行っています。先ほどのサポーターの発表を参考に、しっかり目を見て「困っていることはありませんか？」と聞くようにしたいです。プリンターについては、当初対象は1階のものだけでしたが、システム・サポーターの提案によって、2階CD-ROMコーナーのプリンターも巡回先に追加されました。

システム・サポーターは発足当初から報告をメーリングリストへ流しています。個人が受けた質問とその対応策を全員で共有できるため、メンバー間の情報交換が盛んであることが特徴です。具体的には、自分が解決できなかったケースについて、他のメンバーに解決策を求める、逆に報告を読んで、より効率の良い対応策を提案する等が行われています。このことは、システム・サポーター全員のスキルアップをはかり、利用者へのより良いサポートにもつながっています。そこでは図書館をよりよくするための提案がなされることも少なくありません。実際にシステム・サポーターが提案し、採用されたものを幾つか紹介します。

まず、代表的なものにマニュアル作りがあります。マニュアルは、「誰がシステム・サポーターになっても同じレベルのサービスを利用者に提供できるように」という思いから、2009年度のシステム・サポーターによって提案されました。内容はそれぞれが受けた質問と回答を1本のUSBに記録し、整備・蓄積していく、というものです。現在も追加更新が続いており、対応したことのない質問を受けた場合は、随時マニュアルに書き加える形で引き継がれています。そして、このマニュアルをもとに利用者向けの「PC質問箱」として図書館HPに掲載されています。トップページには「なぜマニュアル作りに至ったのか」というシステム・サポーターの思いも、共に掲載されています。その他、メディアスペース各PCのポップもシステム・サポーターの手作りのものです。

このように図書館側も私たちの提案を積極的に取り入れてくれるし、取り入れられない場合でも「なぜできないか」の部分まできっちり説明してくれるので、提案しやすく、そのことが意見交換や活性化につながっていると思います。今は認知度も上がっていますが、発足当初は友達に「何をやっているの？」と聞かれたり、素通りしてカウンターに質問に行ってしまう寂しかったという感想もミーティングで聞かれていました。最近では質問が増え忙しくなりましたが、利用して貰えることは嬉しい限りです。

図書館業務に関わる経験ができたことは貴重なものでした。当初はスキルにも不安がありましたが、自分一人では対応しきれないときは図書館職員が助言をくれるし、利用者としてメディアスペースにいた同じシステム・サポーターが助けてくれたこともあり、苦に思ったことはありません。思考錯誤して問題を解決できた時や、自分が質問に対応した利用者から帰り際に「ありがとうございました」と声をかけてもらった時等は、やっていて良かったと実感します。こうした利用者からの質問への対応や学生アシスタントのミーティングを通して、ごく自然に他学年・他学科の方とも関わったことは、PCスキルだけではなく、コミュニケーション能力の向上にもつながったと感じています。

また、以前は先生に指示されない限りあまり図書館に足を向けない学生でしたが、システム・サポーターとして定期的に図書館に通ったことで、いつの間にか図書館に行く習慣が生まれていたことも私自身の変化の一つです。利用者として、図書館の活用方法を知ることができたことは、レポ

ートやレジュメを作成する機会が増えた今となってはとても役に立っており、これからも学生アシスタントとして、また一利用者として図書館と積極的に関わっていきたいと感じています。

2) 現代文化学部言語文化学科 4年

2009年度前期と2010年度前期にシステム・サポーターを担当しました。

まず4年間の大学生活の中で図書館がどのように変わったかについて感想を話します。入学年に「マイライフ・マイライブラリー」が採択されて始まったが、リニューアル前にボランティア・スタッフに応募した際は、本当に始まったばかりで何をどうしていいかわからず、ほとんど活動できずに終わりました。2008年4月に大きくリニューアルし、すごく明るい雰囲気になって、利用者が目に見えて多くなりました。以前は堅苦しくて、使いなれた人しか寄り付かない印象があった図書館に、多くの人が来るようになって、最初は不安もありましたが、1階と2階3階との使い分けもきちんとできているように感じます。私自身、1階のコミュニケーション・オープンスペースは授業のグループ活動によく利用しました。飲食やPC利用ができるようになったことで、朝から晩まで1日中図書館で作業したこともあります。このような設備を整えただけではなく、図書館側が積極的に学生に対して様々なプログラムを発信していることが図書館に人を集めている原因になっていて、それと同時に学生アシスタントの存在も広く認知されてきたと感じています。

システム・サポーター業務の感想：学生アシスタントの開始時期に立ち会ったので、自分にとっては凄く思い入れがあるプログラムです。始めたきっかけは、まわりが女子ばかりでPC操作が苦手な人が多く、人に教えて回っていたので、そういう力を活かしたいことと、図書館がもともと好きだったので、図書館で働きたいと思い参加を希望しました。

とくにマニュアル制作に携わったのが印象深いことです。学生アシスタントの発案で始めましたが、その時、私が個人的にまとめていたメーリングリストの質問・回答リストがベースとして使われました。それが現在、形になり、誰でも見られるようになり、スタッフが入れ替わっても引き継がれるようになったことはとても嬉しく思います。自分も一度活動を離れ、戻ってきた際に、以前の活動がまとまっているのは便利だし、時間のつながりを感じるのでも、とてもよいシステムだと思います。マニュアルができたことでシステム・サポーターの活動の基盤できたと思います。今後もっと発展してくれることを希望しています。

先ほどの発表でもあったように、利用者に注意を呼び掛けるポスターやポップ等、学生の発案で次々と環境を良くする工夫がされています。学生アシスタントは、単なるアルバイトと考える人がいてもいいはずなのに、みんなそれに終わらせず、自分たちの活動をもっと良くしていこうと自主的にやっている、そのモチベーションが素晴らしいものですし、それによって日々刺激を受けたと感じています。そして学生のモチベーションを支えているのは図書館員が熱意を持ってプログラムに取り組んでいること、私たち学生の意見を丁寧に聞き入れて反映する姿勢がはっきり示されていることがあります。図書館員の協力・積極的な声掛けがあって自分たちの活動が大きくなったと思っています。

自分は大学のサークル等に全く所属していなかったので、大学に対する所属意識が非常に低かったのですが、図書館の学生アシスタントの業務を通じて、自分と大学とのつながりが深まったと思います。利用する側から、提供する側に回ったことで、図書館だけでなく大学の教育・大学の制度への理解や思索が深まり、自分の大学生活を見直すことにつながったと強く感じています。自分にとって図書館はすごく居心地が良くて大事な存在でした。すごくアナログでアットホームな場所としての図書館が東京女子大学にあると思っています、それを誇りに思います。

3) 文理学部社会学科 3 年

始めた動機は、図書館が便利で居心地が良かったので、新入生にその良さを伝えたいと思ったこと、システム・サポーター等は東京女子大学でしかできないのでやりたかったこと、高校時代からPCは比較的得意だったのでその力を生かしたかったからです。でも、活動当初は緊張の連続でした。というのは、高校まではPCの技術を人に伝える経験がなかったからです。しかし、メーリングリストの質問と回答が残っていたこと、図書館員の方がわからないところを教えてくれたこと、アシスタント・アイランドの席の後ろにPC関連の本があってシステム・サポーターがすぐに利用できるようになっていたので大丈夫でした。

今年度の活動で思ったことは、昨年度に比べて自信を持てたこと、シャットダウンや大量印刷の課題にも先輩方が作成したポップでうまく対応できたことが良かったと思っています。

今後の目標は、これまでの活動を次のシステム・サポーターに引き継ぐことです。理由は、自分が活動を始めた時にあまり戸惑わずに済んだのも先輩方が過去の活動をデータに残していたおかげだからです。また、学生が主体的に図書館に関わる環境を維持することも必要だと思っています。今は始まったばかりですが、今後も発展させ根付かせるためには、大学側の働きかけだけではだめで、学生の主体的な活動が非常に重要だと思います。来年もシステム・サポーターとして活動するので、この気持ちを忘れないようにしたいと思います。

【学習コンシェルジェ】

1) 代表 (人間科学研究科博士後期課程2年)

活動内容報告

学習コンシェルジェとは、大学院学生で構成された学部学生の学習をサポートする学生アシスタント制度のひとつです。他の学生アシスタントとは異なり全員が大学院学生で構成されています。

● アシスタント・アイランドでの通常業務

私の場合は週2回決まった時間に席に座り、学部学生の質問者の相談に乗っています。内容は、授業について、文献探索、レポートの書き方等様々です。その際、相談者の学年・質問内容にあわせて助言することを心掛けています。この通常業務は2008年度からずっと続いています。

● 情報検索ガイダンス (2009年度から)

図書館利用の核となる検索方法について紹介しています。図書館のOPACやデータベースの使い方のデモンストレーションをします。1年生にはOPACや図書館の基本的な使い方、上級生には卒論用のオンラインデータベースの活用方法等を説明しています。

● 基本的なレポートの書き方ガイダンス (2009年度から)

大学で書くレポートの書き方について90分間のデモンストレーションをしています。高校までとは違った大学のレポートの書き方について紹介していて、1年生には基礎的なことを、上級生に対して、とくに卒業論文を書くためのガイダンスでは各専攻に合わせて、博士論文で本になったものを紹介したりしながら、学年に合わせて実施しています。

3年間の活動プロセス

2008年度:

自分が(博士後期課程に)入学する前なので、先輩方から聞いた話ですが、利用者が少なく、工夫の必要性を痛感したということです。

2009年度:

- 前期はやはり利用が少なく、まだ浸透していなかったと思われます。そこで、曜日毎に常駐する学習コンシェルジェの専門分野を明記した表をアシスタント・アイランドの机の上に掲示しました。これが利用促進のための工夫の最初のもので、これをきっかけに、様々な工夫をしていくようになりました。
- そのような中で、2009年度は初年度に比べ、利用が飛躍的に伸び、質問内容も初歩的なものから卒論について等専門的なものまで様々なものになったというのが実感です。学習コンシェルジェもシステム・サポーターと同様にメーリングリストで相談された内容とそれに対する自分の回答の報告を行い、情報を共有していますが、2009年度は日々のチェックが欠かせないくらいに質問の幅が広がりました。
- 学習コンシェルジェが大学院学生であることが認知されてきたので、大学院についての質問等も増えました。他の質問のついでに聞かれることもあり、大学院の入試や大学院の学生生活、将来設計等について聞かれたりもします。
- 認知が広がったために、異なる専門分野のことや大学の事務的なことまで聞かれ始めました。そのような場合には、その専門分野の他の学習コンシェルジェに引きわたしたり、学内事務部署について案内したり、カウンターに引き継いでいます。
- アシスタント・アイランドで隣に座っているシステム・サポーターの活動が2009年度後半から飛躍的に増加したので、パソコンに関する質問をすぐに引き継ぐことが

できるようになりました。大学内や学生アシスタント内の連携が2009年度後半くらいから良く取れるようになってきたと思っています。

このような活動の成果は、2009-2010年度に新規導入した工夫によるものです。以下のように、アシスタント・アイランド定着をはかる様々な活動をしました。

- 新入生オリエンテーションで学習コンシェルジェと学生アシスタント(サポーター)が合同で、図書館案内を含めたサポート体制の説明を行っています。これによりかなり認知度が向上したと思っています。
- 通年にわたって、各種ガイダンスをゼミ・学科単位で、依頼がある際に行っていますが、その都度、学習コンシェルジェやシステム・サポーターの宣伝を入れたので、上級生にもアシスタント・アイランドの認知をはかることができました。
- 学習コンシェルジェの半分くらいは博士後期課程の学生で、そのほとんどがTAもしているので、TAをしている授業で学生に宣伝し、先生へも協力をお願いしました。
- その他、座席の横に看板を設置して、質問例や自分の専門領域について掲示しています。また、席の後ろに「論文の書き方」等の本を置いて利用しやすくしています。これはシステム・サポーターも同様です。

そして、2010年度は、これらの思考錯誤の結果：

- 好奇の目で見られることがなくなりました。
- 現在では椅子も複数置いてあって、気軽に立ち寄って貰える雰囲気になりましたし、とくにTAで担当している学生は気楽に立ち寄って、質問していきます。
- 相談者から感謝の言葉を貰えることをとても嬉しく思います。とくにレポートについて相談に乗り、相談者が書きあげた報告をしにきてくれたりすると、学習のサポートの一助になっていることを実感できます。
- リピーターが増えたことも認知されていることであり、自分が行った助言が良かったのかな、ということでもあり、それも非常に嬉しいことです。

学習コンシェルジェの活動を通して、自分自身に役だったこと、効果があったこと：

- 自分の知識を生かして役立てることができる一方、相手に伝える作業をすることで、自分の知識も整理することができました。それが大学院での研究や論文執筆に効果的に還元されています。
- 相談に乗ることで分野以外にも新たな知識が増えたり、卒業論文関係の相談では相談者から教えられたりもして、自分の知識の幅も広がったと感じています。
- 2年間の活動を通じて、通常業務においては、相手の学年や学習程度に合わせた取捨選択や言葉の使い方を学びました。
- ガイダンスからは効果的なプレゼンテーションの行い方や、多人数の前でレクチャーする時の自分の弱点や長所を知ることができました。大学院学生は大学や中高の教員を目指している人がとても多いので、ガイダンスを通して多人数の前で整理した話をする訓練になっていると思います。異なる分野のガイダンスと担当した時に、授業担当者の先生からプレゼンテーションの方法についてのアドバイスを受けることもでき、ありがたいと思っています。

最後に「学習コンシェルジェとは」、学部学生が学習する際に、先生には聞きにくいことや消化できていないことを整理するための相談相手であり、また、学習コンシェルジェの活動は、図書館と各専攻の先生、コンシェルジェの三者の連携が取れたことで活性化したと思っています。

2) 文学研究科日本文学専攻修士課程 1 年

2010 年度後期から活動しています。ゼミの先生からの紹介で、2008 年度(学部 3 年次の時)に、卒論に関して先生にするのはためられる質問をしに学習コンシェルジェのところに行って相談しました。その時の先輩(学習コンシェルジェ)が「どういった考え方をすればいいか」について解決に導いてくれたことで、心の支えになりました。自分で導き出した答えではありますが、そこにたどり着くまでの手助けをしてもらい、自分自身の中の疑問点が解決しました。

自分が大学院修士課程 1 年になったので、今までの先輩方ほどまでは行かなくても、少しでも助力したいと思って今に至っています。実際に始めてみて、相談してくれる学生のニーズに応えるのは非常に難しいことだと気付きました。他学科からの相談も受けると、今まで触れることのなかった分野のことを聞かれたりして、自分の勉強になり、視野も広がりました。他の学問の視野を自分の研究にも取り入れられるのではないかと、というようなことも考えられるようになりました。経験もまだ浅いのでこれから精進したいと思っています。

3) 文学研究科英米文学専攻修士課程 1 年

活動を始めて日が浅いので質問を受けたことはまだないが、今までの質問・回答をチェックしていつ質問されても良いように準備を整えつつ、学部学生が質問に来てくれるのをどきどきしながら待っているところです。

活動を始めてみて感じたこと：

- 学部 4 年次に前期・後期の 1 年間サポーターとして活動していました。学内にいながらアルバイト、と思って、軽い気持ちでサポーターに応募しましたが、実際に活動してみると、あやふやに認識していた本の請求記号の見方や資料本の検索方法等、一利用者だった時には知らなかったことを学ぶことができ大変勉強になりました。
- 自分の勉強になっただけでなく、利用者の質問に応えることで、学生が学生に図書館利用の知識を教えるという、正に学生協働サポートを実践できて気持ちよく働くことができました。
- 昨年自分の卒業論文執筆時には、学習コンシェルジェに質問して、丁寧に答えてもらった経験をしています。その時に、すでに大学院進学を希望していたので自分でもやってみたいと思うようになりました。
- これまでの質問と回答を見て、学習コンシェルジェが如何に工夫して質問をしてきた学生を導こうと努力してきたかを知りました。学習コンシェルジェは成績に関わるような質問には答えられないため、例えば、レポート作成では質問者が何につまずいているのか見極め、それに気付かせるような質問を投げかけて、質問者が自分で考えていくよう促しています。これは決して簡単なことではありませんが質問者は論理的な考え方を学べるし、学習コンシェルジェは問題発見とその対処法を考えられるので、双方にとって有益なことだと思います。

今学期は残り少ないが、質問者のサポートに一役買えるように努めていきたいと思っています。

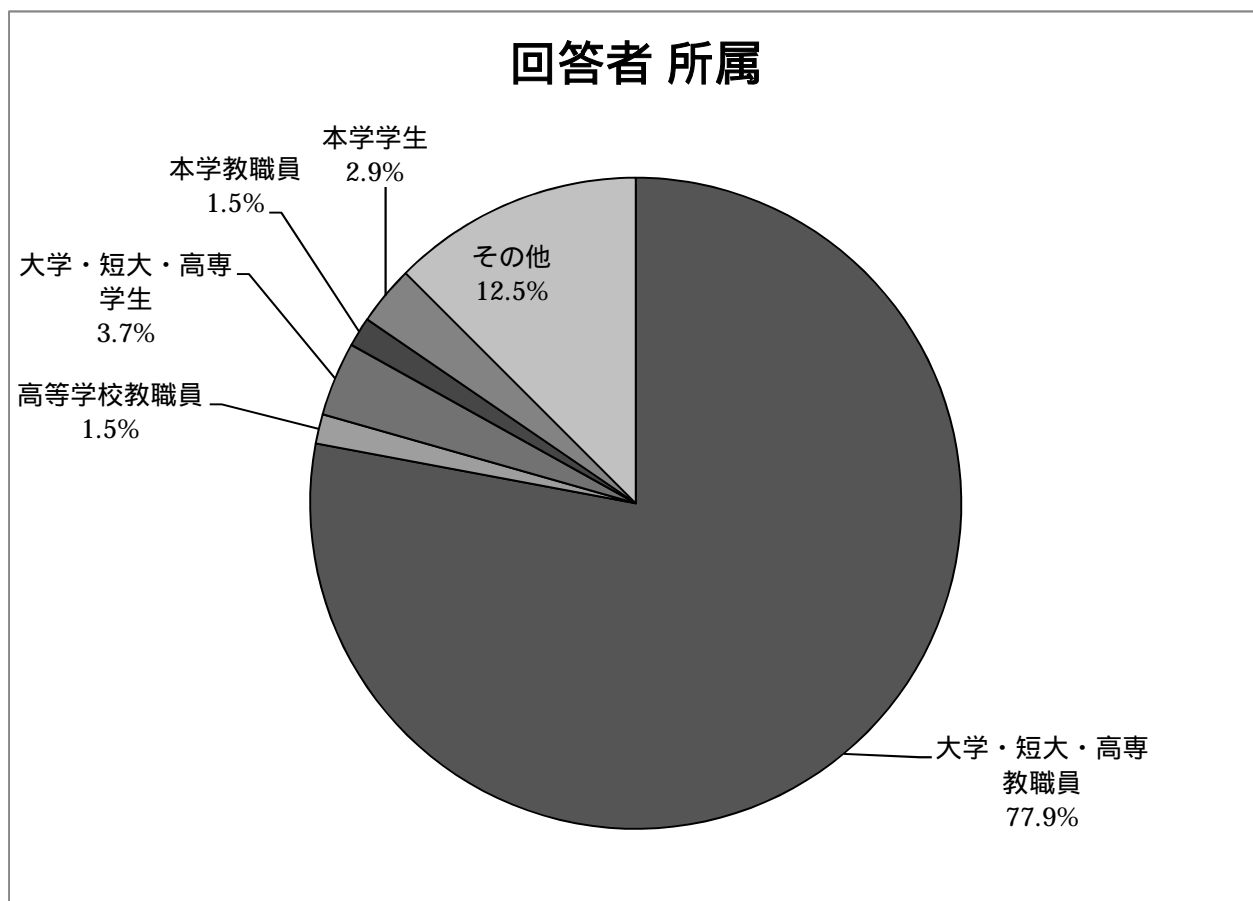
3. 参加者アンケート集計結果

当日の参加者に、参加目的、参加して参考になったかについて訊ねるアンケートを実施した。以下は、その集計結果である。

参加者は大学・短大・高専関係者が多かった。参加目的は、学生協働サポート体制への興味が回答者中 45.8%と最も多く、次が、滞在型図書館への興味の 35.7%となった。参考になったかどうかについては総じて高い評価が得られ、とくに学生アシスタント自身による活動報告については、役に立ったと強く思うが 72.7%、ややそう思うが 26.6%と非常に高い評価を得た。

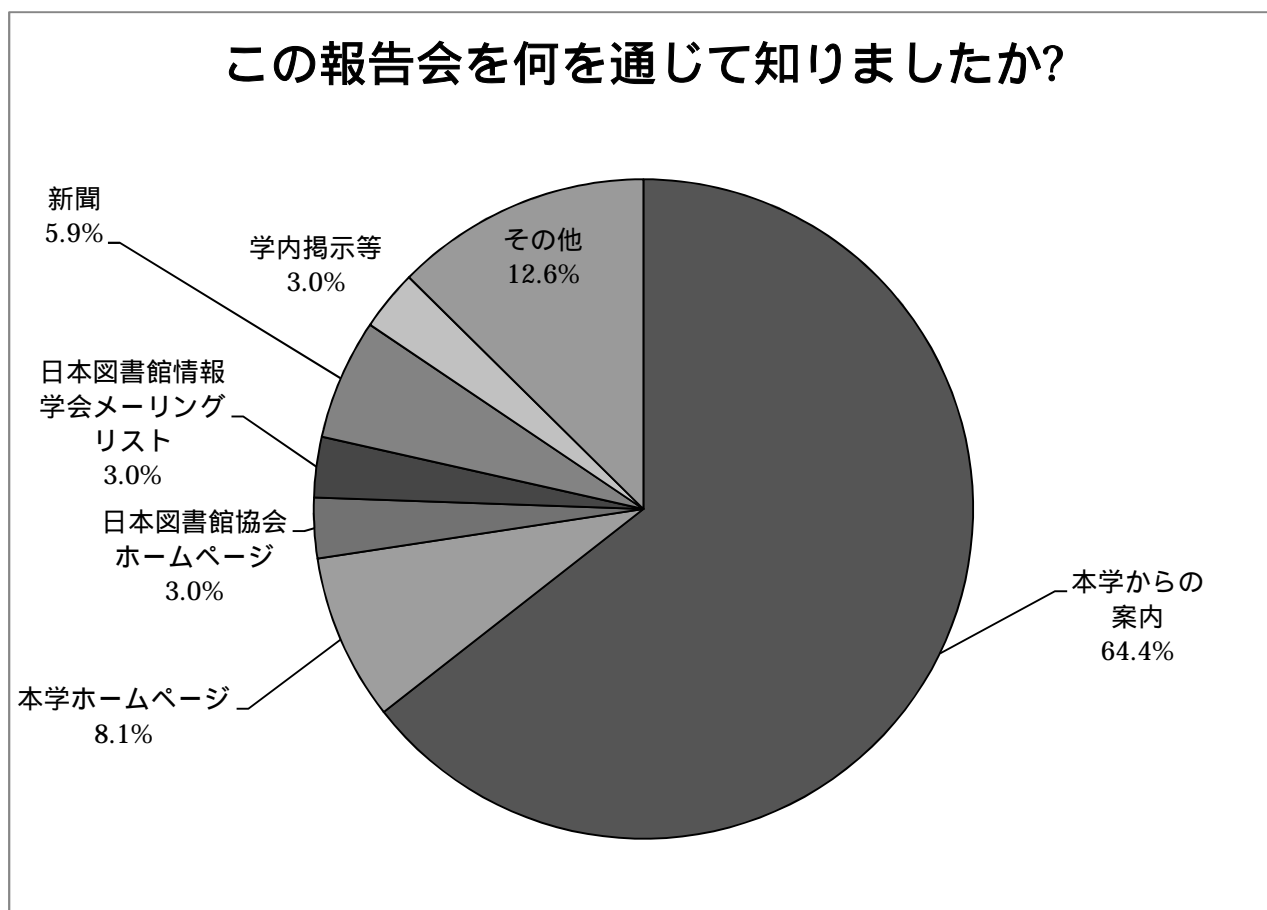
1. 回答者 所属

大学・短大・高専教職員	高等学校教職員	大学・短大・高専学生	本学教職員	本学学生	その他	計
106	2	5	2	4	17	136
77.9%	1.5%	3.7%	1.5%	2.9%	12.5%	



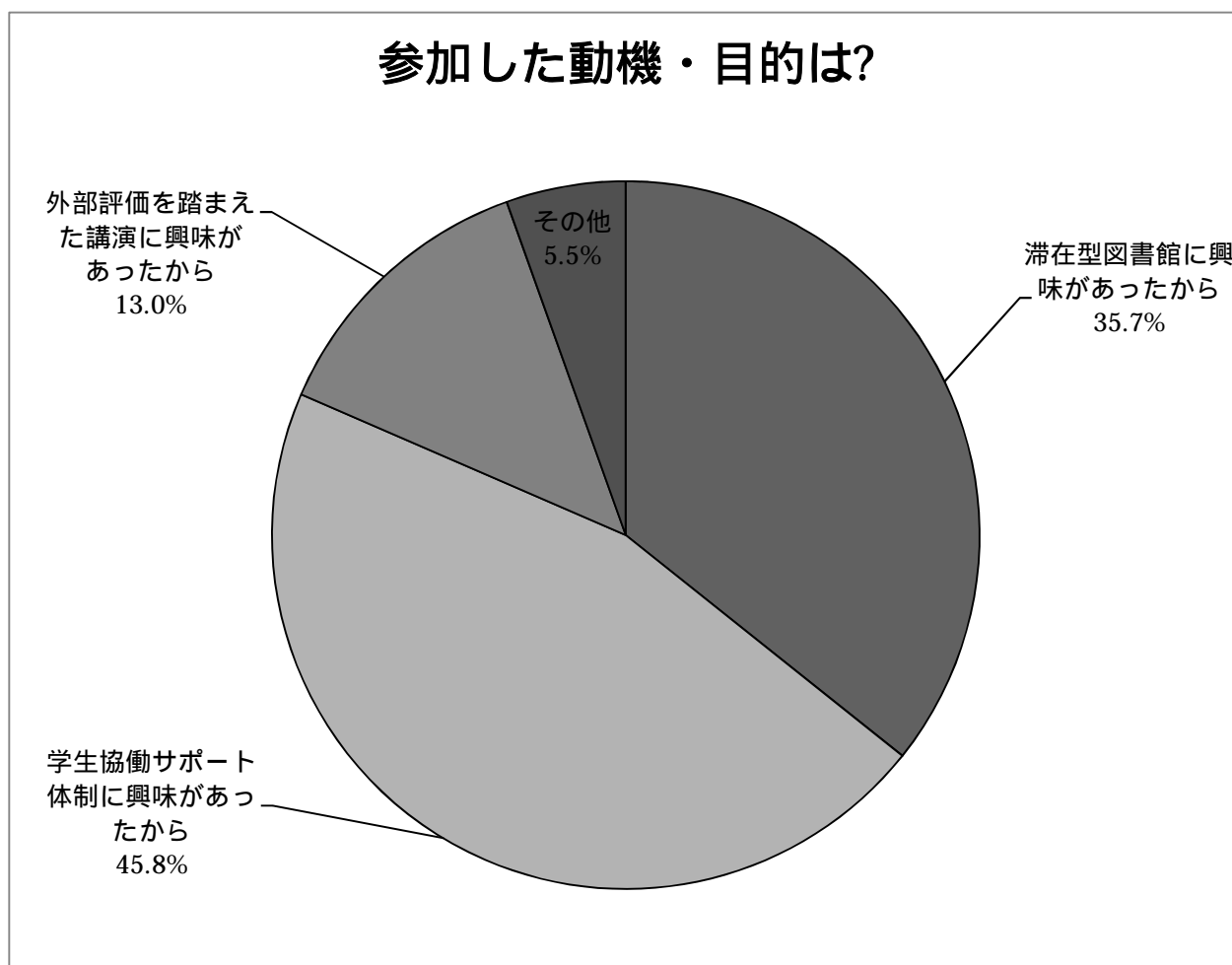
2. この報告会を知った媒体

本学からの案内	本学ホームページ	日本図書館協会ホームページ	日本図書館情報学会メーリングリスト	新聞	学内掲示等	その他	計
87	11	4	4	8	4	17	135
64.4%	8.1%	3.0%	3.0%	5.9%	3.0%	12.6%	



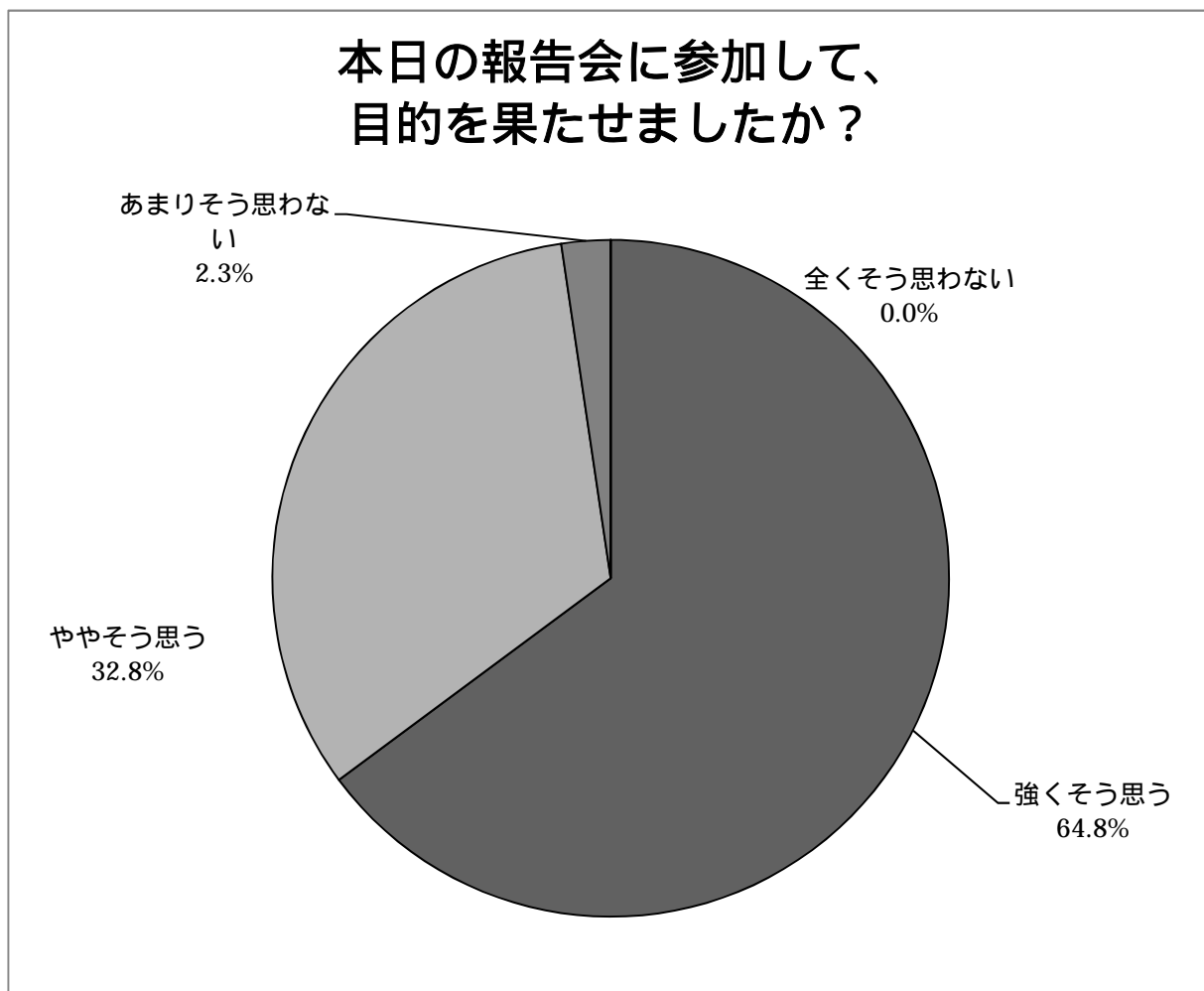
3. 参加動機・目的

滞在型図書館に興味があったから	学生協働サポート体制に興味があったから	外部評価を踏まえた講演に興味があったから	その他	計
85	109	31	13	238
35.7%	45.8%	13.0%	5.5%	



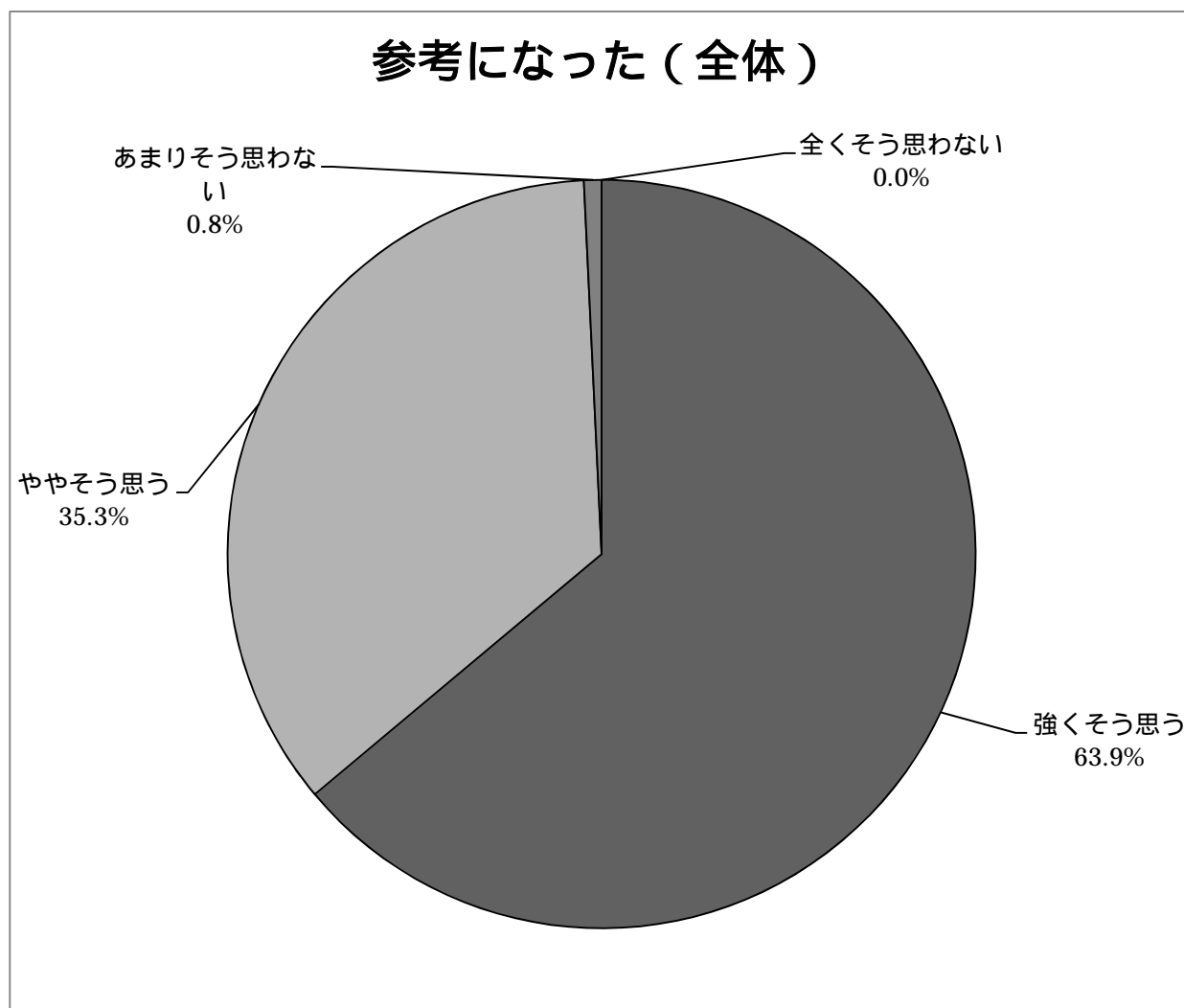
4. 本日の報告会に参加して、目的を果たせましたか？

強く思う	やや思う	あまり思わな い	全く思わない	計
83	42	3	0	128
64.8%	32.8%	2.3%	0.0%	



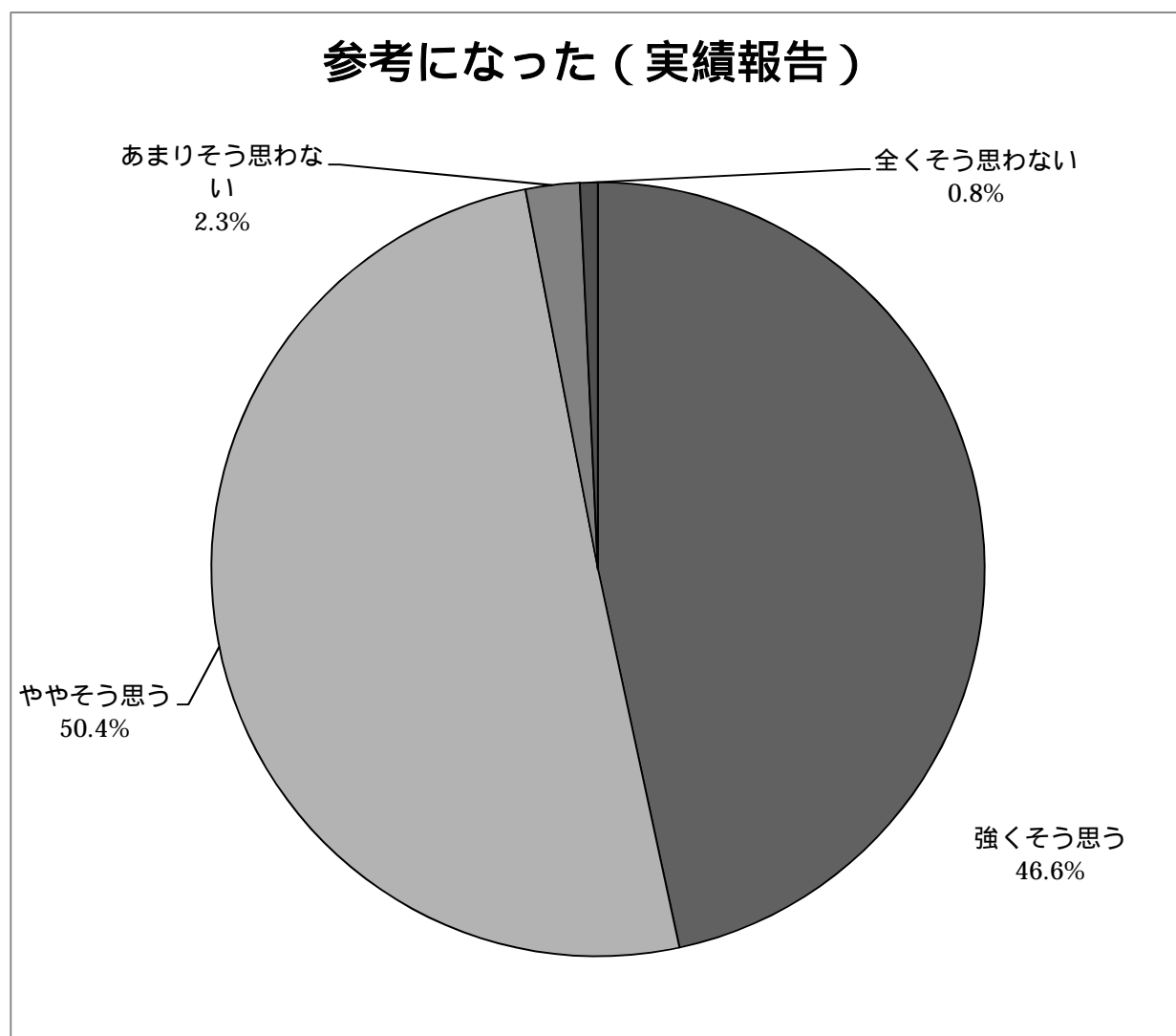
5(1)ご自身あるいはご自身の所属機関にとって、本日の報告会は参考になりましたか？(全体)

強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	計
85	47	1	0	133
63.9%	35.3%	0.8%	0.0%	



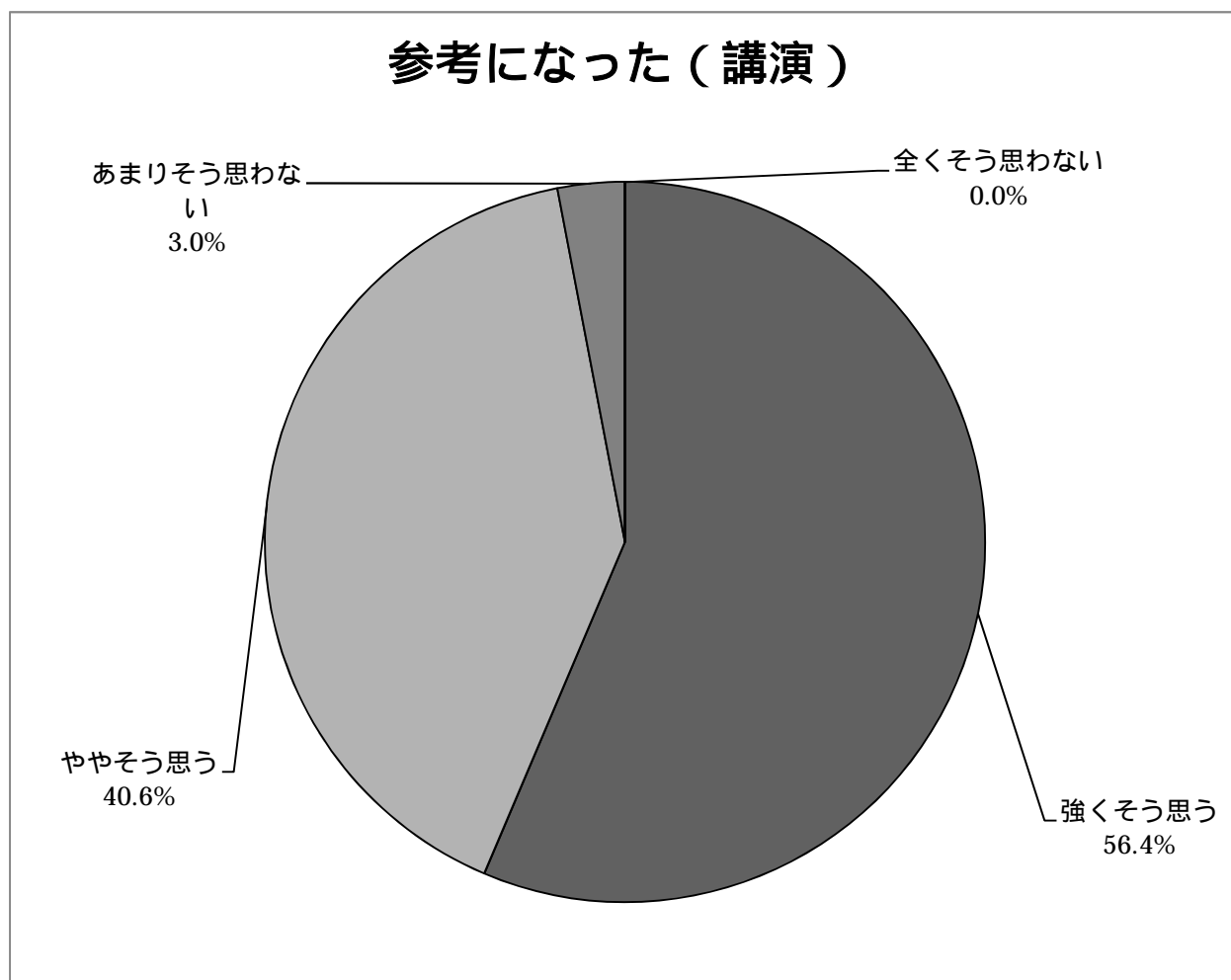
5(2) ご自身あるいはご自身の所属機関にとって、本日の報告会は参考になりましたか？（実績報告）

強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	計
62	67	3	1	133
46.6%	50.4%	2.3%	0.8%	



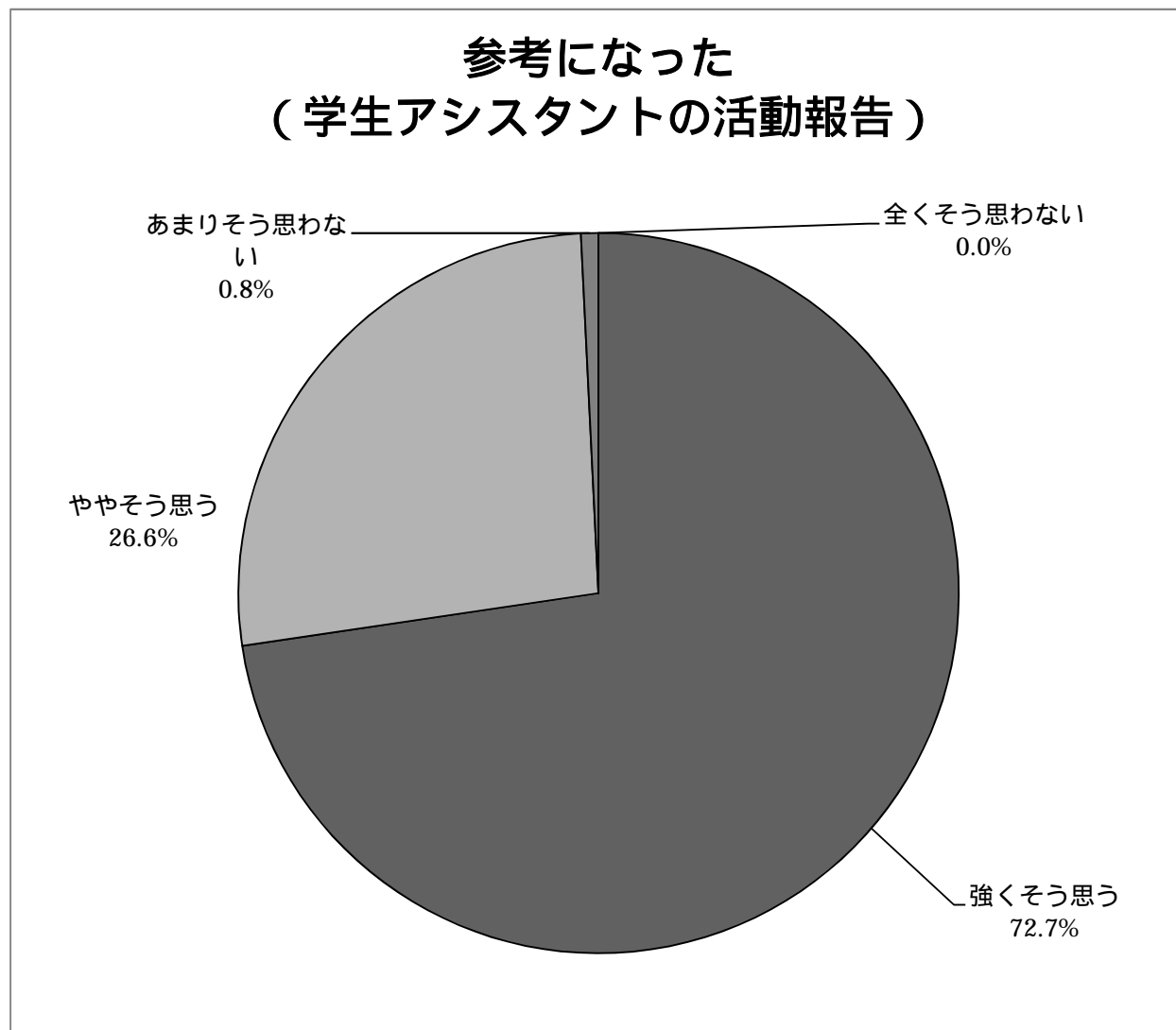
5(3)ご自身あるいはご自身の所属機関にとって、本日の報告会は参考になりましたか？(講演)

強く思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない	計
75	54	4	0	133
56.4%	40.6%	3.0%	0.0%	



5(4) ご自身あるいはご自身の所属機関にとって、本日の報告会は参考になりましたか？（学生アシスタントの活動報告）

強くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	計
93	34	1	0	128
72.7%	26.6%	0.8%	0.0%	



あとがき

「マイライフ・マイライブラリー」実績報告書は、できるだけ生の資料、生の声を載せるように努めた。したがって、統計や資料に対する分析や解釈からはかなり距離を置いた記述となっている。それは、分析の結果やその解釈から本学の「マイライフ・マイライブラリー」を見ていただくことよりも、ありのままを、生の姿で提示することの方が現在の真の姿を理解していただける近道であると考えたからである。公開実績報告会のアンケートで学生アシスタントの活動報告が「参考になりましたか」という質問に72.7%の参加者から「強くそう思う」との答をいただいたことも、生の声が聞けたとの思いがあつてのことであろうと推測している。

本学の自己点検・評価委員会はもとより、外部評価委員の方々からは多大な示唆をいただいた。とくに外部評価委員長としてご尽力いただいた逸村裕先生からは、より広い視点から「マイライフ・マイライブラリー」を評価していただき、さらに今後進むべき方向を含めた貴重な御意見をいただくことができた。

「マイライフ・マイライブラリー」が目指す「学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム」は「支援する側」と「支援される側」とが多層構造をなす中で行われるところに特徴がある。この多層構造の中核となるのが「学生協働サポート体制」である。学生アシスタントとしての認識と実践が「マイライフ・マイライブラリー」の根幹となっていることは、本報告書を一読すれば、容易に理解していただけるものと思う。学生アシスタントをさまざまな面から支えてきた図書館職員の存在も大きい。図書館は本学の教育を側面から支えつつ、その存在は大学教育の中で位置づけられている。学生たちの協働サポート体制の日々の活動を通して、図書館自体も「支援する側」であり、「支援される側」でもあるという思いを強くしている。

「滞在型図書館」への試みはようやく形を整えてきたところであり、問題点も数多く挙げられている。また、不断の努力なしには改善点が見つからないという指摘も受けている。これまで、どのような実践がなされ、どのような問題があり、いかなる課題が見出され、それらにどう応えるのかといった一連の道筋の中で、今どの地点に立っているのかを明らかにすることが今回の実績報告会であったように思う。

今日までの歩みを振り返ることで、立ち位置を見つめ直し、明日への一步を踏み出す十分な力が与えられたことに感謝したい。

2011年3月 東京女子大学 図書館長 兼若逸之



平成19年度 文部科学省選定
「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」

東京女子大学
マイライフ・マイライブラリー
学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム
実績報告書 2007 - 2010年度

2011年3月発行

編集 マイライフ・マイライブラリー運営委員会
発行 東京女子大学 〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1
事務局 図書館課
TEL 03-5382-6285 FAX 03-5382-4928
<http://library.twcu.ac.jp>